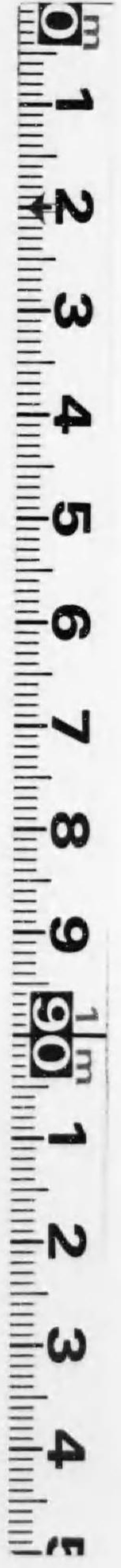


503
231



始



503-23/

反省と憧憬

稻毛祖風著

東京神田
大田同館藏版

大正
12.5.15
丙午

序

本書は、著者が最近數年間にいろ／＼な雑誌の上で發表した感想と紀行とを蒐めたものである。凡そ著者の真相は、學術的なものや體系的なものよりも、寧ろ感想文や紀行文などのやうな斷片的なものに一層はつきりと現れるものと信じてゐる著者は、本書に對して一方ならぬ愛着を感じてゐる。殊に本書は、著者の生涯中で最も大切な時期が開始される數年前の生活記録であることを思ふと、特に感慨が深い。本書に題するに『反省と憧憬』としたのは、一方では過去や現在の生活に對して冷嚴な反省の瞳を向けると共に、他方では將來のよりよき生活に對して熱切な憧憬の血を湧かしてゐる最近の著者の偽りなき感懷が本書の基調を形造つてゐるためである。

本書は目次の示すやうに三編から成つてゐる。そして第一編には、或る題目の下に纏つた感想を語つたものを輯め、第二編には、講演旅行記のみを輯め、第三編には、著

者の主宰してゐた雑誌『創造』に「向陽臺より」と題して數年間連載したものを輯めてゐる。これら三編の中、著者の面影が最もよく現れてゐるものは第三編であるといふ意味に於て、著者はこの編が讀者諸君から最も精讀されることを衷心望んでゐる。

大正十二年三月下浣

東京向陽臺の寓にて

著者

目次

第一編

花もこれから實もこれから……………二

轉向點上に立ちて……………一八

歐米留學に就いて……………三二

憧憬……………四一

頂上の悲哀……………四六

水……………四九

師走……………五二

子供についての觀察二三……………五五

男性美……………六四

婦人の精神美……………七二

原敬氏の暗殺……………八一

丹那隧道の惨事……………一〇三

演説と文章……………一一〇

講演旅行雑感……………一一九

應問隨想……………一二八

「門松や」の狂歌……………一二八

芝居好きの婦人と讀書好きの婦人……………一二九

家庭の娛樂について……………一三〇

私の好きな婦人の髪・顔・姿……………一三二

婦人が早く老けて見える理由……………一三三

見合……………一三四

心中について……………一三五

野口榮子自殺事件……………一三六

原少佐夫人の自殺……………一三七

我が理想の變遷……………一三八

私の辯論上の苦心……………一三九

三従の徳……………一四〇

我が子の嫁……………一四一

適當な婚期と男女年齢の差……………一四三

性教育について……………一四四

さし當つて改めたきこと……………一四五

女學校教育當事者に對する希望……………一四六

尼港虐殺事件……………一四七

第二編

群馬紀行 一五〇

石巻紀行 一五九

四國紀行 一六六

福島紀行 一八五

愛知紀行 一九五

金澤紀行 二〇二

新潟紀行 二〇九

高知紀行 二二〇

秋田紀行 二三七

西國紀行 二四八

第三編

向陽臺より 二六四

目次終



編

稻毛詛風著述書

若き教育者の自覺と告白
青年教師の歩める道
創造本位の教育觀
文化と自然
現代教育の主潮

花もこれから實もこれから

陽春四月、爛熳たる櫻花が、時のほこりを身一つに蒐めて華やかに笑ふのを見ては、誰か生命の勇躍を感じないものがあらう。わけても青春の血潮の高鳴る若人たちに於てをや。青少年期を「人生の春」と呼ぶのもゆゑなきことではない。

人生は創造の泉であり、自然は神祕の森である。自然が無限の驚異を包蔵してゐることに何の不思議もないが、而も私は、花に對する毎にいつも今更の如く自然の神祕

に驚かぬことはない。花はまさしく神祕な自然の微笑である。キリストがソロモンの榮華をすら野の花に如かずとしたのは、必ずしも奇矯の言ではない。自然に一輪の花さへなかつたなら如何に殺風景なことよ。满目荒涼の冬枯の野！吁、思ふだに無限の寂寞を感じずるではないか。晩秋の野邊に咲き残つた名なし小草の三つ二つ、箆にかざす山櫻の一枝、乙女が無言で指し出す山吹のをのゝき、卓上の一輪さしに靜かに笑ふ半開の山茶花、何れか人間の錦心繡腸をうごかさぬものがあらう。

花は自然の微笑である。併し、花に對してはじめて自然の神祕を稱へるが如きは寧ろ淺見である。亭々として天を摩する大幹、時には緑に時には黄に時には紅に、時には芽ぐみ時には繁り時には散る無数の葉片、さては、千紫萬紅の花をも極めて僅かな容積中に包蔵して、而も表面は冷たく、そして地味に装つて平然たる果實こそ、まことに神祕のきはみではないか。花を思ふものは實を思へ。花に驚くものは實に驚け。花を愛するものは實を稱へよ。花あつての實であると共に、實あつての花であること

花もこれから實もこれから

を思はねばならぬ。この意味で、私は、春の華麗、夏に秋の質實を愛するものである。否寧ろ私は、春に於て悲哀を感じ秋に於て歡喜を覺えるものである。

□

神祕は無限にある。私は花に於て驚異を感じ、實に於て讚歎を覺えると共に、花の美しいものは實に於て劣り、實の味よきものは花が醜いことにも亦興趣の湧くを禁じ得ないものである。天一物を與へず、不完全はそれ自然の本性ふ。然り、不完全であるが故に、永しへに完成されざるが故にこそ、自然も人生も存在の價があるのである。花に誇るものをして花に誇らしめよ。實に誇るものをして實に誇らしめよ。大自然は廣漠であり複雑である。併しながら、その間にあつて、桃のやうに花實双秀のものや、或は胡瓜のやうに花實共にそれ程優れてはゐないが而も花と實と時を同じくするものゝあるも亦決してとがむべきでない。

□

人生は自然ではない。青春といふも花顔といふも等しく一個の比喩に過ぎない。嚴密にいへば、人生は刹那々々が花であり實でなくてはならない。少くとも人生の理想は、「花も實もある」生活でなくてはならない。花は人生の形式であり、實は人生の内容である。花に傾けば空華になり、實に偏すれば索漠になる。早く花を咲かさうと思へば永遠の發達は望み難く、永しへにかぐはしき花の薫を止めようとするれば、灌漑施肥に多大の力を注がなくてはならない。眞によき果實を獲ようとするれば、幾分は花の色香を犠牲にしなくてはならない。

更に、これを時の見地から見れば、花は青少年時代にたとふべく、實は成年時代に比べることが出来る。天真と華麗と修養とが青少年の特權であり、深刻と質實と事業とが成年の生命である。哄笑が青少年の幸福であり、活動が成年の歡喜である。併し

ながら、人間として眞に尊敬すべきは、永しへにこの両面を併せ具へたものである。天真にして深刻なもの、修養と事業との相即するもの、笑ひながら働くものこそ、はじめて花も實もある生活を營むことが出来る。

親愛なる讀者よ。未だ誇るに足る花も實もなき私をして姑く私一身について語る自由を持たしめよ。

□

青少年が花の時代なら、私の青少年時代は梨の花にもたとふべきか。人目に觸れぬ田の畦や畑の隅で、度ましやかに而も清く寂しく、只秋の實りのみを樂しみとして、雨風にも怯げずに咲いてゐたのが私の青少年時代であつた。勿論、私にも戀もあり歌もあつた。併し、それらは夕暗に仄匂ふ梨の色香の如く淡くそして清らかなものであつた。私は、物心ついてから十年の間はひたすら生家骨肉の幸福のための全力を

傾け、爾後十年の間もまたひとへに研究と仕事とのために向上精進の一路を辿つてゐた。今や後數十日で満三十五歳にならうとしてゐる。七十歳を古稀の齡とすれば、私は既に人生の半ばを過してゐるが、自覺的な生活のみが嚴密な意味の生活であるとするれば、今日の私は少くとも時間的に人生の追分に立つてゐる。花より實に移るべき時代である。事實昨日今日の私は、一方では靜かに過ぎ來した自己の半生を回顧すると共に、他方では將に來らんとする後半生に對して熱烈な憧憬の瞳をかきやかしてゐる。私のこれまでの生活はいはゞ準備の生活であつて、これからこそ命がけな生活だからである。

かやうにいつたからとて、私のこれまでの生活がよい加減な生活であつたといふのではない。否私は、私の創造主義の一つのモットーたる「人生は只一度である。そして眞に實在する人生は現在の一刹那のみであるが故に、現在の刹那を無限に愛惜し、現在の一刹那に於て最善をいたし、斯くして何時死んでもよいだけの覺悟を持つやう

にせよ」といふことを具現することに全力を傾倒して来たから、少くとも主観的に見るかぎり、これまでの私の生活は断じて文字通な準備の生活ではなくて、生活其自身であつたと確信してゐる。随つて、春風秋雨時には花咲き時には實のつて以て今日に至つたのである。

けれども、生活の真髓は創造であり、そして創造は、主観的にして客観的、個的にして普遍的な事象であり、随つて價值ある生活即ち創造生活を営まうとするには、自分の生活をして真に主観的であることが真に客観的であり、真に個的であることが真に普遍的であるやうにしなければならぬと信ずる私にとつては、これまでの生活は依然として準備の生活に過ぎなかつた。何故なれば、私の生活をして上に述べたやうなものたらしめるには、何よりも先づ其の原動力たる私独自の創造性を見出すと共に、この創造性を十分に保持發揮伸展することに依つて、私でなければ成し遂げ得ない、そしてそれが私自身にとつては勿論廣く國家社會乃至世界人類にとつても價值あ

る業績を擧げ得るやうな使命を發見し、理想標的を樹立することが必要であるのに、私のこれまでの生活は、畢竟するにこの點に主力を傾倒されたからである。事實私は、少くともこの數年間は反省と懷疑とに懊惱復懊惱の生活を閲して来た。「我は何であるか。」「如何に生くべきか。」これが最近數年間に於ける私の生活の中心主題であり主要關心事であつた。私の生活が表面的には華々しくもなく又伸展の歩度が速かでもなかつたのは、主としてこれがためであつた。

幸にして、最近漸く前途に一道の光明を見出し、足下に一個の基石を敷くことが出来るやうになつた。私は漸く自己の真相を觀破し自己の真使命を體得することが出来た。勿論、人間の本性は創造性であるかぎり、自己の瞳で自己の瞳を見ることが出来ないやうに、自己の真相を理會することは恐らく永遠に不可能なことであらう。随つて、私が今日自己の真相と思ひ自己の真使命と感じたことも誤謬であるかも知れない。そのために私は更に一層慎重な態度で自己の真相と真使命とに對する反省と思索

とを試みなくてはならない。これと共に、幸にして私が今日考へたことが眞實であるとしても、眞我を十分に發揮し、眞使命を十分に貫徹するには、更に一段の準備と修養とを要するが、小人の悲しさ、今日の境遇では到底この要求を實現することが出来ないから、近い中姑らく故國を離れてさすらひの旅に出たいと思つてゐる。

□

私は、自分の長所は考へることにあると信じてゐる。併し、單に圖書堆裡の腐儒として論理的遊戯を事とする事は、私には適しないことである。思想と實行との調和といはうか、全我的生活といはうか、考へること即ち思索研究を中心とし動力とし、心身全體を統一的に活動させることによつて、渾然たる独自の生活を創造したいと思つてゐる。そしていふ所の思索研究も、人間の思索研究の中で最も根本的なものを選びたいと思つてゐる。哲學を以て自己の専攻科目と定めた所以が茲にある。併し、哲學は

兎角空理空論に流れ易いと共に、私自身の前半生の經歷を生かし私自身の創造性を十分に發動させるために、私は教育と道德との根本義を闡明する點に努力の焦點を結びしめるつもりである。私が教育哲學と道德哲學とを専攻科目中の専攻科目として選定したのはこのためである。

かやうに、私が教育哲學や道德哲學を研究しようとする動機の一部が實際的方面にあるがために、學問の研究だけでは私の要求が全的満足を得ることが出来ない。斯くして私は更に一步を進めて實行にうつらなくてはならない。但し、大まかにいへば、一切の云爲行動が道德であるが故に、道德哲學の實生活化には敢て特殊の方途を要しないが、教育哲學の實生活化には必ず何等か特殊な手段を選ばなくてはならない。私が將來に於て自ら教育の任に膺りたいと思ふ理由の少くとも一つはこの點にある。尙私が見るところに従へば、教育は被教育者の全教育期間を通貫してのみはじめて其の價値を發揮し得るものであり、殊に、私の教育觀は下は幼兒の教育より上は高等専門の教

育にも適用し得ると共に、この全教育期間を対象として考案されたものであるがために、出来得べくんば、幼稚園より大學までの全系統を網羅した教育に従事して見たいといふのが私の衷心要望である。そして教育の方針は、勿論創造教育即ち一種の穎才教育にあるから、さし當り教育の研究に於ては、教育哲學の研究と共に穎才又は創造性の研究に着手しつゝある。尙、私自身はいふまでもなく、私の一家眷族及び知己朋友で初等中等の教育に従事してゐるものが多く、そしてそれらの人々は大抵教育者といふ職業に不満を感じてゐるばかりか、更に、日本の初等中等の教育者の大半がこれと同様であるし、そしてこれは教育者その人にとつてはいふまでもなく、あらゆる方面から見て由々しき大事であると思ふので、私は、この教育者問題の解決又は進展といふことに對しても理論と實際との両面から應分の寄與貢獻をしたいものと考へ、今日では先づ其の理論的方面に幾分の力を割いてゐるのである。



創造生活は受容に即する寄與であり、そして寄與の價値がやがて生活そのものゝ價値であるかぎり、私共は發表表現又は積極的活動を重大視しなくてはならない。殊に、思想生活を生活の中心とするものに於ては、必ず思想の表現といふことを重大視しなくてはならない。この意味に於て私も、思想の表現法即ち文章と辯舌とに力を用ゐつゝある。將來に於てもこの努力を繼續して、筆と舌とを思想生活の武器としたいと思つてゐる。一言にすれば、先づ思索によつて獨自の價値を主觀的に創造し、これを筆と舌と手によつて客觀化しようとするのが私の生活の方途である。随つて、私が來るべき生活の道程に於て花咲き實る幸ある春秋に遭逢しようと思ふならば、何よりも先づ私の生命の野に深く埋まつてゐる種子に培ひ灌がなくてはならない。然るに、發芽には時期があるやうに、培灌にも亦時期があつて、それを過せば如何程優秀な種

子も力強く發芽することが出来ないのである。そして、私にとつては、今日こそ、今後數年こそ、正しく發芽の時期であり随つて培灌の絶好機會である。この意味に於て、私は今正に人生の追分に立つてゐるといはなくてはならない。

然り、私にとつては今後數年こそ最も大切な時期である。中年期は凡そ何人にとつても人生の一大危機であるが、私にとつては恐らく生涯の最大危機のやうに思はれてならない。天には懷疑の雲も見え、誘惑の風も聞える。地には倦怠の濠も横たはり、惰性の河も流れる。この間に介在して能く永しへに精新潑瀾たる創造生活を持続するには、必ずこれらの風雲濠河によつて、傷害されないだけの強い力を生命に附與しなくてはならない。この意味に於て、今日の私にとつて最も緊要なことは、「修養」の一事を他にしてはない。事實私は今衷心勉強したいと思つてゐる。諸々の情實から解放されて、眞に自らの好み、眞に心から要めるものゝ研究に全力を傾倒したいと思つてゐる。幸にして私の生命中に何等か花となり實となるものがあるならば、やがて花咲

き實る時も來るであらう。花が咲くのも實が生るのもすべてがこれからである。今日私は只全力を盡して私の生命の根柢に培ひ灌ぐのみである。

勿論私とても、私に先んじて花咲き實る人を羨しいと思はぬことはない。併し、人生に於ては先後が直ちに優劣ではない。早春に咲くのが梅の本性なら晩冬に咲くのが枇杷の本性である。そして本性に従へばこそ色香もまさり實も熟する。春に咲く花をして春に咲かしめよ、夏に實る果をして夏に實らしめよ。私は或は秋花さいて冬實る身かも知れない。由來我が國には早咲が多過ぎる。殊に近頃は室咲の一夜花すら少ない。萬花散つた荒涼の秋の野に徐ろに而も氣高く咲く黃菊白菊の一本二本はこの國の文化の園にあつても差支はあるまい。

□

今や春は酣、花は咲き花は散る。浮かれ易きは春の人心よ。私の生命にもまだ紅い

青春の血潮が流れてゐる。かぐはしい花のたよりに心動かすことがないでもない。けれども、それは所詮春風の音信に答へる葉末の叫びに過ぎない。生命の本幹は春雨のめぐみを受けながら刻一刻と伸展し、やがて自ら花咲く時の來るのを待つてゐる。花見る人よ。花に觀らるゝ人よ。時を得顔に亂れ咲く花のみに酔ふことなく、永しへに綠なす常磐木も見よ。落花の下に漸く芽生えした許りの小草も見よ。やがて爛熳と開く時を待ちつゝ堅く含笑む蕾をも見よ。自然は複雑である。而も人生は更に更に複雑である。全體を見よ。そして個を觀よ。——個に於て普遍を見、刹那に即して永遠を讀み得る人のみ真人といふことが出来るではないか。

□

花にもあれ、實にもあれ、語るべきことは猶無限にある。併し、與へられた問題に對して徹底した解答を試み得るものは自ら花か實かでなくてはならない。花でも實で

もない下萌草の私の感想は、恐らくこの華宴の正座に即く資格を缺くであらう。止みなんかな。私は只、この誇るべき色も香もなき感想が、或はかぐはしき花を持ち、或は美はしき實を持つ諸家の感想の間にあつて、せめては單調を破る一つの色どりともなればよいのである。

轉向點上に立ちて

— 歐米留學の方針 —

一

私は今一個重大な轉向點上に立つてゐる。——

凡そ生活は、不斷の流續であり無限の創造的過程であるかぎり、一切の刹那はそれぞれ目的であると共に手段である。併し、等しく流續といひ創造的過程といつても其の間に緩急強弱等幾多の差別が存することはいふまでもない。私の生命は、これまで淺く細く緩いなりに兎に角流れつゞけて來た。そして多年の惰性の結果、私は淺く細く緩く流れることに對して左程不滿を感じないでゐた。併しそれは何れかといへば私

の境遇のためであつた。果然、境遇の變化に伴ひ、長い間胸中に秘められてゐた不滿が最近に至つて俄に勃發して來た。私は、淺く細く緩く流れてゐる自己の生命の姿に對して心からの不滿と憎惡とを感じずるやうになつたばかりでなく、自己の生命の流れ來り、流れ行きつゝある方向に對しても少からぬ疑惑を懷くやうになつて來た。今や私は一切の過去を葬つて新しいスタートを切らなければならぬ時となつた。——私は今正しく一個重大な轉向點上に立つてゐる。

二

私の最近は所謂幸福であつた。勿論顯要な地位を占めるでもなく、赫耀たる名聲を荷ふでもなく、巨萬の富を藏するでもないが、私の生活には「自由」があつた。寸毫の阿諛も屈従も虚偽も要しない程生活が自由であつた。年に二三冊の書は公にし、月に三四度講演をし、毎月數篇の小論を認める他は、午前中に寝ね夜半に起き、多忙と

いつて客を辭し、早朝から子供を連れて遊びに出かけても、心に疚しさを感じたり自己の本務を害つたりすることが少かつた。簡易生活にも慣れて來た。段々衰乏にも介意しなくなつて來た。小さな家族も愛と理會とを以て結ばれてゐた。少數ながらも精神上の知己を全國到るところに持つてゐた。そして身體も健全であつた。——私はたしかに普通の意味に於て幸福であつた。併し、私はこの種の幸福には到底満足してゐることが出來ない。

「自己は唯一者也、人生は只一度也。」これは私の生活上の題句である。人生は創造である。獨自にして優秀な創造をする所に人生の目的も意義もある。私は常に斯く信じ斯く要め、且これを事實化することに努めてゐた。そして私は實際この信念と要求とを或る程度まで事實化した。私のこれまでの生活は決して無意義なものではないと私は堅く信じてゐる。併し、それらは私の理想からはるかに遠ざかつたものである。それにも係らず、最近迄これに對して大して不満を感じなかつたのは、要するに現實に

囚はれて理想の光を曇らしたからである。今や再び理想の光が現れて來た。私は到底過去及び現在に満足することが出來ない。

私は長い間惰性に引きづられて來た。私は長い間小成に安んじてゐた。私は長い間低級な幸福に酔うてゐた。私は長い間僅な自由を誇りとしてゐた。私は勿論鈍根劣機ではあるが、未だ成し遂げ得ること、成し遂げねばならぬことを持つてゐると信じずにはゐられない。それが抑も何であるかは今日ではまだ明瞭には自覺してゐない。私は何よりも先づ自我の真相を觀破しなくてはならない。私は何よりも先づ自己の行くべき道をさがさなくてはならない。これは嚴密に云へば勿論永久の仕事である。人生は結局眞我をたづね廻る順禮だからである。事實、私はこれまでとても斷えず自己の行くべき道を捜すことに努めて來たと共に、この努力を無意義に終らしめなかつたと信じてゐる。併し、それは幾多の拘束制約の下に成されたものである點に於て、時としては誤謬がないとはいひ難い。私はこれを恐れこれを憂ひてゐる。私は出来るだけ

開放された境地に身を置いて、赤裸々露條々の自己を見たい。自己の本然の要來以外に何等の拘束も制約もない境地に身を置いて、反省されるだけ反省し、観察されるだけ観察し、試みられるだけ試みた上で、金輪際動かない自覺の三昧境に到達したい。そしてそれがためには祖國を離れる他には道がない。——外遊の一大動機一大理由がやがて茲にある。

三

私は將に家を離れ祖國を去つて外國に行く。併し、私は單に外國を知らんがために外國に行くのではない。姑く在來のあらゆる羈絆や傳統から離れ、新しい環境に身を置くことに即して「自己」を知らんがために外國に行くのである。随つて、私は出来るだけ在來の生活——因襲や情性から解放されることに努めるつもりである。思想生活に於ても實際生活に於てもなるだけ新味を加味すると共に、出来るだけ複雑廣汎で

あつて而も深遠徹底であることに努めるつもりである。たとへば主要關心事であり中心努力である讀書に於ても、大體は哲學の研究を主とするが、其の他道德藝術・宗教・思想・政治・教育・自然科學等の方面にも力を注ぎ、哲學も單に現代哲學とか獨逸哲學とかいふだけではなしに、プラトーンから現代に到る世界の代表作を廣く多くそして落ちついて繙き、十分に讀破したいと思つてゐる。この他『バイブル』は勿論、『コーラン』も『易經』も『論語』も『老子』も『佛典』も『萬葉集』も熟讀玩味したいと思つてゐる。住所も勿論主として獨逸に止つてゐるが、佛・英・白・和・瑞・澳・伊・米の諸國をも一通觀るつもりである。そしてその視察も單に教育方面とか學校方面とかいふだけではなく社會の表裏上下、藝術宗教産業等に關する方面までも及ぶつもりである。更に、私は勿論留學中數種の専門的著述をするつもりであるが、その他戯曲の形で人生觀を表現して見たいと思つてゐるし、歌や句や詩なども作つて見たいと思つてゐる。要するに、生活を出來るだけ解放し、出來るだけ自由にすると共に、豊富に且精確に新素材

を受容することによつて、靜かに自己の真相が那邊に存するかを確知したいと思つてゐる。随つて今日の私には歸朝後の方針の如きは全然未定である。

勿論、以上のやうな結果、今日理會してゐる自己が眞の自己であり、今日懐いてゐる理想が眞の理想であり、今日進まうとしてゐる方向が眞の方向であることが明かになつたならば、私は次の方針に出るつもりである。即ち、第一に學者として哲學の研究（教育哲學及び道德哲學は其の主要部）と著述とをなし、第二に思想家評論家として論壇に立ち、第三に教育家として自ら教鞭を執り、且この三方面を統率するには創造主義を動力基礎とするつもりである。併し、これは勿論單に一個の空想に過ぎないかも知れない。三年の日子は短くして長い。その間に如何なる變化が思想上性格上に起るかは何日到底豫斷することが出来なう。

四

過ぎし日のことを回顧すれば、私は無限の悔恨と羞恥とを感ずる。明治四十五年夏

早稲田大學を出てから滿十ヶ年の間、私はいつも薄氷を踏む思で生活を續けて來た。

時には權者に膝を屈し、時には敵者に媚を售り、時には虚名に驕り、時には利欲に囚はれ、時には體裁を飾り、時には時代に阿り、時には安逸に耽り、時には現在を呪詛し、時には將來を悲觀しながら、踳跟として危い足取で進んで來た。そしてこれは畢竟するに、自己の真相と自己の眞方向とを知らなかつたためである。三年間の心の修養に依つて、私はこの弱點を出來るだけ十分に匡救したいつもりである。これからは本當に確乎たる生の大道——自己自身の途をすゝむつもりである。何ごともうちからの要求によつて行ひ、何時も自己の良心に従ふやうになりたいと思ふ。この意味で、私は何よりも先づ自己を確立しなくてはならない。勿論私は主として學問の研究思想の培養のために力を注ぐが、それは畢竟自己を確立し自己を理會するためである。私は最も十分な意味で「人」になりたい。優秀な「人」になりたい。單なる「學者」や

單なる「思想家」や單なる「教育家」にはなりたくない。随つて私の留學中の修養も、所謂「留學生」といふやうな人達とはかなりに其の撰を異にするつもりである。命令によつて何々學を研究し、歸朝後何々校の何々科の教授となるといふやうに、型に嵌り切つた「留學」をする人達とは甚しく其の趣を異にするつもりである。私は勉強をしながら、三年の間に歸朝後如何やうな境遇に身を置くかを眞劍に着實に考へて見るつもりである。私が七ヶ年間掬育した「創造」を休刊するのもやがてこれがためである。それだけ私の留學には危険性が伴ふと共に、又それだけ自由味が多い譯である。私は左程物質欲が強くないと信じてゐる。たとへば住宅の如きも卒業後借りたマツチ箱のやうな小さな家に十年間住みつけてゐるし、講習會や講演會の報酬なども自ら要求したことは一度もない程である。貧乏育ちの家族も私同様簡易生活には慣れ切つてゐる。随つて私は將來物質のために人格を傷つける怖れは比較的少いこと、信じてゐる。随つて又私の自己が確立しさへすれば、私の前途は第一義的な意味で今日

よりも幾分かゞやかしいものになると思つてゐる。今度こそ本當にいのちがけな生活をしたいと思つてゐる。

私は勿論、これまでとても人並には「働いた」つもりである。著書だけでも十年間に三十冊を公にしてゐる。併し、これまでの活動にはまだ眞劍味が足りなかつた。まだ血のにおみ様が少かつた。まだ質が劣つてゐた。いろ／＼な會合などにも關係して見たが、どれもこれも申譯的なものお座なりなものに過ぎなかつた。講演旅行なども大分やつたが、大抵受動的のもので、頼まれたからするといふ程度のものであつた。雑誌の編輯經營にしてもまだ全我的ではなかつた。歸朝後には凡てに對して發動的にすべてに對して眞劍になるつもりである。

いふまでもなく現代の日本には改造すべきことが山程である。そして私によつて成し遂げられることも私でなければ成し遂げられないことも決して少くはない。私はそれを知つてゐながらこれまでやらずにゐたのである。否やれずにゐたのである。こん

どは必ずやる。萬難を排して自己の使命は貫徹する。その先決問題は自己の眞使命を正しく理會することである。使命を貫徹しようとする熱意を涵養することである。

五

私は、この數年間、極一部のひととの交渉を除いては孤獨な生活を營んで來た。恩師、先輩、友人は勿論、親戚などからさへ離れてゐた。私は、欣びも悲しみも小さな家族と共にする他は自分の胸奥深く納めて來た。而も私は、祖國を去ることによつて益々孤獨になるつもりである。「一人の力」それをしみる」と考へて見るつもりである。「孤獨の寂しさ」それを心行くまで味はつて見るつもりである。所謂「山に入る」のである。併し、歸朝後は出來るだけ團體生活社會生活の長所を活用して自己を普遍化したいつもりである。そして他人との交渉に於ても、私の所謂創造主義の生活法に則つて、過去に於ける失敗を繰り返さないつもりである。

ひとり社會生活ばかりでなく、私的生活家庭生活に於ても、これまでは没自覺的傳統的な部分が多かつた。住宅にしても服裝にしても食物にしても、まだ「自己の本質に合致させるために改造すべき餘地が多いと思ふ。この點についても私はしつかり考へを定めて來たいと思つてゐる。更に私の趣味とか趣好とかいふものについても、これまでは至つて無關心に過して來たが、これまた自己を確立する一助として反省して見るつもりである。

六

私の心は頓に歐洲の天地に對して憧れてゐる。而も今三男は病床に横たはつてゐる。家兄も未だ全快はしてゐない。併し、二人ともやがて幸福な新年を迎へることが出来るであらう。私には今脱稿せねばならぬ著述三つあるが、それを三月中旬までに仕上げて下旬の船で神戸を出發するつもりである。そしてマルセイユに上陸して伯林

に行き、暫らく滞在して言葉の稽古や観光やをした後、憧憬の地たるハイデルベルヒを訪れ、こゝに居を卜し、リッケルトを通してカントの哲學、マールブルヒ派の哲學の研究を主にし、序にゲーテの主著を讀破するつもりである。この目的が略達しられたら、興味の傾向に従つて、順次コーエン・ナトルプの一派とマイノング・フッサールの一派の本據を訪れ、暫らく兩派の哲學を研究し、やがて認識論的方面に一かたがついたら、來年の冬は埃太利・瑞西・伊太利を歴遊し、次いで再來年の春には佛國に赴いてベルグソンやデカルトやギョーヤルソーやブートルローなどを研究しながら佛語の稽古をし、夏季には白耳義和蘭を一瞥して英國に渡り、暫く倫敦に滞在してベーコン・ロック・パークレー・ヒューム・ラッセル・シラーなどの代表作を精讀し、三年目の正月には再び獨逸に歸り、何處か静かな所に落ちついて、スピノーザ・ライブニッツ・ヘーゲル・ショーペンハウエル・ロッツェ・ハルトマン・ニイチエ等の代表作を味はひながら、自分の思想を整理して二三の著述を完成したいと思つてゐる。勿論、この間に學校を

視察したり、教育書や思想書や文藝書を繙いたりするつもりである。そして四年目の初めに米國に亘り、コロンピヤをはじめ有名な大學に哲學者及び教育學者を訪問したり、有名な學校や圖書館や博物館などを觀たりしながら、ジェームス・ミユンステルベルヒ・ロイス・デュロイ・スタンレー・ホールなどの主著を再讀し、やがて大正十五年の櫻の時か又は私の好きな新緑の頃に歸朝するつもりである。

七

書くべきことはまだ多く多い。併し、私の心は今幼子の病氣で一ぱいになつてゐる。随つて茲には只減入つてゐる心に一鞭當てて、多年知遇を辱うしたばかりか、私の留學のために後援會まで企て、下すつた愛讀者諸君に對し、私の希望や豫定の一端を披瀝して感謝のしるしとするだけに止めなくてはならない。三年の月日は短くして長い。私は心から讀者諸君の健康と前途の光明とを祈つて筆を措く。

歐米留學に就いて

一

私の海外留學は多年の希望であつた。併し、早稻田卒業後の數年間は、病氣や學資金の返済や家庭の煩累や社會的地位の築設やらで、この希望の實現に努力するなどといふことは思ひもよらぬことであつた。やがてこれらの心配が略無くなつた時には、私は文筆家——評論家著述家として生活を營むこととなつてゐたし、そしてそれはかなり多忙であつたと共に兎に角さして前途の不安を感じな。てもよいやうな境地に居ることが出来たので、留學の希望は未だ白熱しなかつた。其の後、主力を教育の方面に傾注するやうになるに至つて多忙は益々多忙となり、自ら經濟生活も幾分良好と

なつて來たが、それだけまた私の精神生活は常に少からぬ不安を感じてゐた。それは、私の生活の方針が確定しないと共に、修養殊に讀書研究が次第に忽諸に附することを餘儀なくされるやうになりかゝつて來たからである。爾後一兩年の間、私は斷えずこの煩悶懊惱の擒となつてゐた。幸に、やがて生活の方針殊に研究の方針が確定したために、精神が幾分の安心を見出したが、多忙はいやが上にも多忙となつて來るので、研究の不足に伴ふ不安の念が頓に強烈に感じられるやうになつた。そしてこの不安を靜める途は海外留學を執行することを他にしてはしないと決心するに至つた。——これは今より三年前のことであつた。

不幸にして、當時父は不治の病魔の擒となり、母も亦甚だしく老衰の徵候を呈してゐたので、兄一人弟一人の私の身としては、どうしても右の希望を執行することが出来なかつたのみならず、嘗て長男を三歳にして喪つた身には、人一倍かよはい次男や生れたばかりの三男のことも氣がかりなので、私の決心は益々鈍るばかりであつた。斯

くして悲しい昨年となり、母を二月に喪ひ、漸く滿一週年を過すか過ぎない中に今年また父を永久に見送ることゝなつた。

葬儀のために歸郷した私の心は、深い哀愁に鎖されながらも多年の宿望を果さうとする欲望が火の如くその奥底に燃えてゐた。斯くして私は未だ初七日も過ぎない中にその實現に着手したのである。幸にも、或る篤志家の助力を獲ることが出来たので、いよいよ來春獨逸に向ふことゝし、今はひたすらその準備に力を注いでゐる。

□

私の留學は勿論勉強のための留學である。私一身のためにはいふまでもなく、一貧寒生たる私に多額の留學費を提供して呉れる恩人のためにも、私のために少からぬ犠牲を拂ふ家族のためにも、乃至は私を激勵して呉れる友人知己のためにも、私はこの留學をして出来るだけ意義あるものとしなくてはならない。私の心は今矢竹に逸つて

ゐる。今日にも明日にも發足したい心持がする。併し、この舉をして眞に意義あるものとするためには、出来るだけ周匝な準備をしなくてはならない。

私は何よりも先づ研究の方針を定めなくてはならないが、これは幸にして既に決定してゐる。私は主として私の畢生の事業の一たる「教育哲學」を研究したいと思つてゐる。そして私から見れば、この目的を達成するには何よりも哲學の研究が必要である。而も私に必要な哲學は廣義の理想主義の哲學又は批判哲學である。これ、私が主要留學地として獨逸を選んだ所以である。併し、私が獨逸を選んだ理由は單にこれだけに止らない。割合に費用がかゝらないといふことも一つの大きな理由である。この他、私は獨逸の國民性と國情とに深い興味を懷いてゐる。あの野趣横溢といはうか素朴といはうか、兎に角原始的なそして精力的で勤勉な國民性が私の深い共鳴を喚起する。一敗地にまみれた獨逸が今後如何にして國勢を挽回するか、殆ど根柢から破壊されたといつてもよい獨逸文化の廢墟の上に將來如何なる新文化の殿堂が創建されるか、哲學

を力と信ずる獨逸の哲學々徒はこの未曾有の大難關に際會して其哲學を如何に改造し活用するか、といふやうなことが昨今深く強く私の心胸を動かしつつあるのである。

この他、私は獨逸の藝術殊に文藝に對して少からぬ興味を持つてゐる。最近は身邊多事のため、遺憾ながら靜かに藝術を鑑賞する餘暇を持たなかつたが、私はこの度の留學の際には、必ずこの渴を醫して來たいと思つてゐる。十年前の學生時代のやうに純真な氣分にかへり、異郷の客舎で夜もそくまでゲーテやハイネやハウプトマンなどに讀み耽ることを想ふと、いはうやうなき淨福を感じる。主要目的の達成を妨げない限り、私は出来るだけ獨逸文學の代表作を讀んで來たいと思つてゐる。私はまた獨逸の音樂にも少からず心を惹かれる。貧乏書生がどれだけよい音樂を聞く機會を持ち得るかは知らないが、少くとも私の音樂趣味が高められることだけは疑ひないことと思つて樂しみの一つとしてゐる。

かうして、私は眞直に獨逸に向ふばかりか、留學期間の大部分を獨逸で過すことゝ

なるであらう。但し、私はフランスの文化にもフランスの哲學や藝術にも少からぬ興味を持つてゐるので、出来るだけ多くフランスにも行つて見るつもりである。殊に、幸にしてフランス語は手ほどきだけはあるので、それを仕上げるためにも是非行きたいと思つてゐる。英國は割合に興味がないが、教育の状態や一般國情を理會するためには或る期間は必ずこゝで過すつもりである。最後に米國であるが、私は去年までは主として米國に行く覺悟でゐただけ、この國に對しては獨逸に次ぐ興味を感じてゐる。殊に、教育の研究はどうしてもこの國を措いてはないと思つてゐるし、更に「教育哲學」といふ科目が大學にある位であるから、事情が許すならば最後にこの國に遊ぶつもりであるが、其の期間は決して長いことはなからう。

□

以上で、略私の留學の方針を語つたつもりであるが、私はこの他研究問題を持つて

ゐる。一つは、私の所謂「創造性」即ち獨創力とか天才とか穎才とかいふもの、及びそれと聯關して廣義の穎才教育に關する研究をして來る考である。これは私の創造主義に心理學的基礎を附與する上に必要なことだからである。一つは、教育者問題——教育者の生活狀態殊に教育者間の會合とか組合とか社會的活動の狀態とかいふもの、及び教育者養成の狀態教育者修養の狀態なども調査して來たいと思つてゐる。

□

來春といつても餘す所の時日が幾干もないので、私は今一方では諸種の準備を整へることゝかなり多い文債を清濟することゝで多忙を極めてゐる。出發期を來春と定めたのは主としてこのためであるが、一つは父の喪中であることゝ、一つは年内には發足しないことを堅く家族に約してゐることゝが一部の理由を形造つてゐる。因に、私は後に殘る家族のためにさして心を煩はす必要がないことを家族に對して感謝してゐる。

る。

□

留學の價值はいふまでもなく相對的のものである。外國に行つたものが皆えらくなるなら外國人は皆えらい筈である。結局は人の問題である。只私が留學を喜ぶのは、専心勉強が出来ることである。これまでの私の勉強のやうに、功利や應用やを直接目的とする勉強ではなくて、本然の要求に従ふ勉強のための勉強が出来ることである。一日に二三時間や四五時間の斷片的な勉強ではなくて永續的な勉強が出来ることである。そして私自身どれだけの價值があるかは知らないが、落ちついて讀書研究をする力だけは人並に具へてゐると信じてゐるが、この信念が幸に正しかつたならば、私は私の留學をして徒爾に終らしめるやうなことは恐らくあるまいと思ふ。併し今日の研究方針の如きは果して眞に私の本性に合致してゐるものかどうかはわからない。留學

中に、時によつてかくれた自己を見出した結果として方針の変更を見るやうなことがないとも限らないが、若しもさうなつたら、これは私のために却つて慶賀すべきことである。何故なら、外国に行くのは外国を知るためではなくて、外国を知ることにして自己の真相を理會するためだからである。私が三年の間に何を贏ち得るかは歸朝後の生活が自ら證明することであらう。

□

私の心は今勿論はるかに遠い異郷の空に飛んでゐる。併し、私の衷心考へるところのものは、出發までの半歳餘の月日を如何に有意義に送るかといふことである。

憧憬

沈黙

憧憬— 何といふ若々しい感じのする言葉であらう。青年時代の特色はこの一語で悉すことが出来るといつてもよい。憧憬は純真な、生一本な、緊張した、そして生氣潑瀾たる精神状態である。憧憬はエラン・ヴィタルの動力であり、創造の源泉である。善も美も眞も聖も皆憧憬の力に俟たぬものはない。生活の價値は憧憬の有無乃至大小であるといつてもよい。單に眼前當面の問題のみに囚はれて何ものにも憧憬せぬやうな生活に價値ある生活はない。墮落とは憧憬のない生活のことである。自暴自棄とは自ら憧憬の心を滅殺したことである。死とは憧憬の源泉が涸渴したことである。人間にとつて最も恐ろしいことは憧憬の消失である。たとひどれ程不幸な境地に沈溺し、たとひどれ程の罪惡を犯しても、憧憬心が涸渴しない限り、人はいつかは救はれ

るのである。然り、最も偉大な一つの資格は偉大な憧憬の人たることであり、最も幸福な人の一つの條件は断えず憧憬の對象を持つてゐるといふことである。

憧憬心はかなりに早くから發動するものであるが青年期に於て最も旺盛な發動を見ることが出来るのである。青年が英雄崇拜的心情に囚はれるのもこれがためである。青年が高い理想を樹立して其れの實現に全我を獻げるのもこれがためである。青年が戀愛而も精神的戀愛に陥り易いのもこれがためである。青年が多くは「夢見る人」であり、多くは抒情詩人であり、多くはロマンティックであるのもこれがためである。

憧憬は全我的態度に伴ふ精神状態である。併しながら、その中心を形造るものは感情である。そこに憧憬の長所もあれば短所もある。憧憬は勿論生命詳しくは生命の精隨たる創造性を原動力とするものである。而も其れは理知と意志とを伴はない状態である。何とはなしに求める心である。何ものとも知れぬものを望む心である。憧憬は在處離れである。理知と協同してゐないために明確な目標を缺くと共に、意志と提携し

てゐないために實現の可能性が薄弱である。憧憬の心に隙があり、憧憬が失敗の原因となるのはこれがためである。随つて憧憬をして眞に價值あらしめんがためには、理知と意志との力を藉りなくてはならない。憧憬の價值は畢竟するに形式的價值である。憧憬の價值が最も多く發揮されるのが藝術殊にロマンティックの文藝に於てであるのはこれがために他ならない。

憧憬は童話に始つて宗教に終るものである。桃太郎は幼年の憧憬の標的であり、乙姫は少女の憧憬の對象である。英雄や異性や美や善や眞やに對する憧憬を通過した絶對境は聖に對する憧憬である。唯一者最後者としての神に對する憧憬である。ロマンティックの哲學たとへばプラトンの哲學やシェリングの哲學の如く、實在に對する憧憬を哲學と見た時には、哲學も亦憧憬の極致であることが出来る。憧憬は中途半端な心境である。憧憬は未だ烟りつゝあるのである。憧憬を憧憬の儘にして置くかぎりそれはさしたる價值がない。憧憬は可であるが併し憧憬だけでは足りない。憬

憬をして炎々たる火とするには油が必要である。一度離れた魂をしかと身に添はすことによつて人をして真に全我的ならしめるための油——理知と意志とが必要である。

現代は憧憬の必要な時代でありながら案外に憧憬のない時代である。求めよ、さらば與へられることは現代人にとつて最も必要な信條でなくてはならない。蓋し現代は創造の世紀だからである。然るに現代人は餘りに目前のことのみに関はれてゐる。當面の問題の解決と正確な打算とに傾き過ぎてゐる。憧憬の子たる少年乃至青年男女さへ尙且憧憬なき生活を營むものが多い。現代人の生活が殺風景なのはこれがためである。現代がせち辛いのもこれがためである。現代の少青年男女がこせ／＼して小利口なのもこれがためである。戀愛にすら憧憬のない現代は呪ふべきかな。藝術にさへ憧憬のない現代は悲しむべき哉。

終りにいふ。人生は創造である。そして創造の一要因たる要求の一姿態が憧憬である。私は只創造の名に於てのみ憧憬を是認し讚美する。然り、憧憬は只創造に結實す

るかぎりには於てのみ價值あるものである。

頂上の悲哀

登山は今や殆ど流行となつた。併し、私はこれを以て單なる流行と観ずることは出来ない。何となれば、登山といふことには種々の意義が存するからである。

人間の本性は向上にある。そして登山は、要するにこの人間性の最も單純な表現發動である。登山が最も多く青年に好愛されるのは蓋しこれがためである。随つて、登山の眞味は未知のそして困難な山に登ることによつて味はふことが出来る。未知の世界に對する燃えるやうな憧憬、幾多の冒險の可能、これのないところに登山の本當の味ひはない。この意味で、同じ山に而も何等の危険もないやうな山に幾回も登つたことを誇りとするが如きものは、永久に登山の眞義を味解することが出来ない。併し、事實に於ては如何に斯くの如き登山者の多いことよ。

更に、徒に高い山に登ることを欲するものも亦眞に登山の意義を理會したものといふことが出来ない。勿論、高い山に登るのは低い山に登るよりもたしかに愉快である。併しながら頂上は要するに目的地點であり到達點である。そして人生は寧ろ過程が到達點である所に意義がある。随つて、其の通路の如何を度外視して徒に高さを欲するが如きは、未だ眞に人生の意義に目覺めたものといふことは出来ない。この意味に於て、私は、富士登山者よりも寧ろ白馬登山者に敬意を表する。若し夫れ頂上に到着した時が登山の最大幸福であるといふが如き人がありとしたならば、私は到底斯くの如き人と人生を語り登山を談ずることが出来ない。

勿論、私とても、絶頂に到達した時には愉快を感じる。幾多の困難を感じたあの山の岳が、凡て我が脚下におとなしく潜伏しつゝある様を見て而も愉快を感じぬものは、恐らく世に一人もあるまい。併し、これを以て登山の眞幸福と思ふものは未だ登山の醍醐味を知らないものである。何となれば、頂上に達したことはやがて下山すべ

きことだからである。頂上に於て感ずる愉快は、緊張の乃至向上の愉快ではなくて、弛緩乃至戻下の愉快だからである。少くとも私は頂上に達した時には愉快と共に無限の悲哀を感ずる。この意味に於て、私は、登山の眞幸福は八合目九合目に達した時に於て味ふことが出来るといひたい。否、極言すれば、私は登山によつて到底眞の幸福を感ずることは出来ない。私には頂上があるといふこと即ち其れ以上登ることが出来ないといふことは、考へるだに無限の悲哀である。あゝ頂上なき山！如何程登つても永しへに頂上が雲表に神々しく聳えてゐるやうな山！この種の山こそ眞に私の登山慾をそそる。而も斯くの如き山は世界の何處にもない。これ私が登山を敢てしない一つの理由である。然らば敢て問ふ、頂上なき山に登らうとする私の要求は果して何處に於ても充たされないであらうか。

水

奇しきは水のすがたである。私は水に於て生命の神秘を讀み人生の默示を解する。私が水を愛するのは必ずしも偶然ではない。

水は生命の象徴である。生命の本質は流續にあり變化にあり力にあるのに、水は流續と變化と力とを以て其の一大特質とするからである。水はたしかに變化が激しい。恐らくは千變萬化の語を以て形容することが出来るであらう。冷却すれば氷ともなり沸騰すれば蒸氣ともなるのが水である。静まれば明鏡と澄み激すれば怒濤と荒れるのが水である。更に、虔ましくも名無し小草の葉末に宿る水滴や深山の苔蒸す岩の間から寂しく滴る岩清水から、全世界を圍繞する大洋に至るまで、河川湖沼濠池瀑井の差別も、雲霞霧霰霰雹氷雪霜雨の變化も、等しく皆水の種々相に過ぎないではないか。

實に水程不可思議なものはない。愛すべきも水である。驚くべきも水である。恐るべきも水である。更に又水は人間の生活上空気を除いては最も必要なものである。火なき生活にも堪へることが出来る。食なき生活も亦忍ぶことが出来る。併しながら、水なき生活は想像するだに恐ろしい冷索單調不便な生活である。吾々は常に水に親しむのあまりその價値を忘れてゐるのみである。

斯くの如く、變化は正しく水の根本特色である。そして生命も實有も亦變化を以てその一大屬性とする。この點から見て、私は、哲學の鼻祖タレオスが、宇宙の根本物質を水であると斷じ、アナキシマンダロスが宇宙を流動體とし、更に、東洋の詩人が流水を以て人生を形容したことに少からぬ興趣を覺えるものである。然り、水はたしかに實有や人生の象徴である。その現實を彷彿するのみならず、その理想をも暗示する。随つて私に於ては、水に象どつて生きることはやがて眞に意義ある生活を生きることであり、水を愛することはやがて眞生活を愛することである。

由來私は水を愛する。哲學的藝術的に水を愛するばかりでなく、實用的にも水を愛する。殊に夏に於てさうである。私は斷えず冷水を以て含嗽するのを習とする。甚だしく溫浴を好むのも私の性情の一特質である。雨の日を好むのも私の一性向である。或は酒茶果物等を好むのも水と没交渉ではない。而も恥しいことには、常には水の價値を自覺することなしに水に對してゐる。然るに、今夏八月特に暑氣の甚だしい際に海近きあたりを旅行し、殊に秋田に於て斷水の憂目を見るに及んで、今更の如く水の價値の高大なことに驚歎した。秋水漸く澄まんとする初秋九月の劈頭に際して、茲に水の頌を掲げる素懷は偏に讀者諸君の推斷に委ねることとする。

師走

またしても歳の暮とはなつた。忙しい師走が来た。――

凡そ世人は大抵師走をいとふものであるが、私は必ずしもさうではない。勿論嚴密な見地から見れば、四季それ／＼月々それ／＼否一刻々々それ／＼皆没すべからざる独自の特色と價值とを具へてゐる。併し、月並な眼で見れば、誰しも冬よりは春がよく、十二月よりは一月が好ましい筈である。随つて、私は世人が師走や歳末を厭惡することを必ずしも非難するものではない。「ひまで居る人も師走は師走かな」といつたやうに師走や歳末は多忙だからである。「行く年や壁に耻ぢたる覺書」といつたやうに師走や歳末には悔恨や羞恥が多いからである。況んや經濟生活が困難なものには、寢ても醒めても苦勞が絶えないのが師走や歳末だからである。併し、單にそれがために

師走や歳末を徹頭徹尾厭惡するのは斷じて誤りである。

試に思へ。何がために師走や歳末は多忙であらうか。一年中の結末を附けたり、年頭に立てた豫定の殘部を遂行したり、さては來るべき新年の準備をしたりするためではないか。併し、これは道徳的には厭惡すべきことでないばかりか、寧ろ大に意義あることではないか。自己に忠實なことの證據だからである。反省と要求、追懐と向上との併存を意味するからである。更に、眞の進歩の動力だからである。勿論、偏に俗事のみを煩はされて淺薄皮相な生活に墮したり、おどましくも悔恨や羞恥や經濟的苦惱の掬となつて暗黒無殘な境域を彷徨したりするものにとつては、師走や歳末はたしかに厭惡すべきものであるが、さうでないものにとつては、花や鳥に浮かれて夢のやうに過す陽春の候や、晝寢と夕涼とを仕事として自墮落な生活をする盛夏の候や、風月に對して偏に感傷的な涙を流す仲秋の候よりも、更に、將來の希望に安んじて歌戲醉笑に日夜を過す新年よりも、峻嚴な人生の現實に面接し、周匝な戒心と眞摯な態度と

を以て着々それを超越して行くと共に、過去を顧みることには即して將來の改善をはかる師走歳末には、はるかにはるかに高い道德的意義があるではないか。

人生を遊戯場と解し、無爲徒食を誇とし、無自覺を恥としないものは止む。苟くも人生を創造と解し、明確な自覺と真剣な態度とを以て永しへに向上精進の一路を辿らんとするものは、斷じて師走歳末を厭惡してはならない。併し、人生の真相は過程を到達點と見ることには存するかぎり、單に、師走歳末を厭惡せず、師走歳末に於て意義ある生活を營むことのみに安んじてはならない。然り、睦月年頭に於て師走歳末の心を持つもの、否四六時中いつも睦月年頭と師走歳末の心を以て生活を營む人にしてのみ、はじめて眞に意義ある創造生活を生きることが出来るのである。

子供についての觀察二二三

□

帝展の招待日のことであつた。私は午前十一時頃うちを出た。と出合頭に私の次男と同級生でお友達のSさんが一人で學校から歸るのに遇つた。それから一町ばかり行くと私の次男に遇つた。それからまた一町ばかり行くとやはり私の次男と同級生のKさんとAさんが連れ立つて歸るのに遇つた。同じ時間に學校を出て同じ方向に歸る尋常一年生の子供たちが各自分達の好む儘に道を歩いてゐるのを見ると、寤翼の感と嚴肅の感とをかたみに感ぜずにはゐられなかつた。

私のちき近所のSさんには私の子供と同じ學校に通つてゐるお子さんが二人ゐる。その中で一番大きなKさんといふ五年の男の子が私の子供と最も仲がよい。一人で遊びに来ては二時間も三時間も私の子供のいふが儘に電車や汽車の繪を描いて呉れる。私の子供も心からKさんを好んでゐるのでまだ一度も争つたことがない。朝なども、Kさんが自分の弟と妹とを置き去りにして私の子供を誘つて二人で學校に行くと、後から妹のAさんと弟のYさんが驅足で二人を追ひかけるやうなことが少くない。私は心からよい友達を持つた我が子の幸福を喜ぶと共に、Sさんの家庭殊に親切でおとなしいKさんに感謝してゐるが、それと共に、自分の弟妹よりも他人を好いて居るKさんの心持を思ふと何となく涙ぐましい心持がする。

□

八つになる私の次男は生來臆病で、時々W-Iなどに行き遊ることがあると、三つになる三男がヨチ／＼した足つきで驅け出して椽側に出て「兄ちゃん、まア坊見て上げるからこはくないよー」といふ。私はどうかしてこの三つの子に「夜はこはい」といふ感じを與へたくないものだと思つてゐる。

□

漸く一人の守を頼んだ。三男の喜びはたとへやうがない。そしてお目見を早々馴染んで仕舞つた。と何かの拍子で小さい聲で「ねエやいかないでね」といつた。湯ヶ原に行く時臨時に頼んだ守に行かれて了つて失望した苦い經驗を思ひ出したらしい。翌朝守の父親が訪ねて來ると泣き出した。そして守に「ねエやいかないでねエ」を繰り返

した。或る時この守が來客を取次いだ。客の歸つた後で取次の仕方を話し出したなら、守の側で遊んでゐた三男がいきなり立つて來て「ちやん／＼ばッ！お話してはいけな
い！」と早口で云ひながら小さい手で私の肩を四五度叩いた。私が守を叱つたと思つ
たらしい。これを見た守は目に涙を湛えて彼をなだめた。私は勿論彼を心からいぢら
しく思つてゐた。

□

この三男はまことにいぢらしい子である。時々いぢめられながらいざとなれば第一
に兄をかばふのは彼である。彼をいぢめたために彼の兄に小言をいつたり叱つたりす
ると、例の「ちやん／＼ばッ！」を言つて兄に加勢する。兄が泣きでもすると直ぐ其
の頭や額を小さい手で撫でながら「兄ちやん泣くな！」と慰める。——どうかしてこ
の心を傷つけないものである。

彼は又おもちやの馬を非常に愛撫してゐる。馬に乗りながら繪本を見たりお菓子
を食べたりしてゐるのはいふまでもなく、おいしいお菓子でも貰へば直ぐ「お馬にも」
といつて食べさせる真似をする。御飯を食べる時も側に置いてそれに片手をかけなが
ら食べることも決して少くない。

□

子供は案外に物飽きがしないものである。私の次男の如きは昨今毎日電車の繪を十
位描かないことはない。又昨年までは花咲爺の話を毎日一度位づゝやつて幾百度に及
んだかわからないが、それで飽きたとはいはなかつた。現に昨今は同様に花咲爺の話
を三男に殆ど毎日一度位づゝして聞かしてゐるが、其の度毎に充實した興味で聞いて
ゐる。

或る日次男が學校から歸つて來た時に、「只今！」といふ挨拶が何となしに元氣がないので何か學校であつたかと聞いて見たら、受持の先生が休んだのでつまらなかつたと泣顔をして答へた。

子供が學校の先生を力にしてゐることは案外である。殊に幼年の子供程さうである。

子供はよく嘘をいふものである。そして子供の嘘は一概に非難すべきものではない。それは「想像」には「創造」が含まれてゐることがあるからである。又子供は嘘と事實との區別を忘れて嘘を事實と信じてゐることもあるからである。併し、道徳的

の嘘は決して看過してはならない。そして少し注意しさえすれば、子供は案外に本音を吐くものである。

世の中で最も憎むべきものの一つは子供に嘘をいふことである。子供を欺くことである。或る時、私は小さな子と一緒に葉書をポストに入れる約束をしてゐた。ところがそれを忘れて自分一人に入れて來た。子供は火がついたやうに泣き出した。私は心から自分の罪を謝し、新しく葉書を認めて彼に持たせ、彼を抱いてポストに入れさせて漸く謝罪の意を表した。

大きな子は、食事の際に大抵分けて與へられた香の物を残すので、或る時いつもよ

り少し與へたら忽ち食へて仕舞つて追加を請求した。翌日又元のやうに餘分に與へたら又残してゐた。

□ □

大きい子のために態々銀座まで行つてレインコートを買つて與へたが容易に用ゐやうとしなかつた。所が、一度着たら大抵な雨降りには洋傘を持たずにコートを着て行くやうになつた。

□

子供は直覺力の非常に鋭いものである。殊に愛情に就いてさうである。本當に子供好きの人であるかどうか、本當に子供を愛する人であるかどうかは、大抵な子供が一見して略正確に直知するものである。子供のさらひな人が言葉の上などで子供の機嫌

をとつても子供は容易に懐かないものである。

子供の好き嫌ひといふことは當てにならないものである。子供はよく「一等好きだ」とか「一番嫌ひだ」とかいふやうな絶對的な最上級の形容詞を用ゐるものであるが、その眞意は「今、一等好きだ」とか「今、一番嫌ひだ」とかいふことにあるのは、何人も氣がつく所であらう。

□

ふだん湯の好きな私の小さな子が、或る日湯が鐵砲に零れてヂューと音を立ててから、湯がこはいといつて中々這入らなくなつた。一夜の如きは、いろ／＼なことをいつて漸く泣くのすかして湯に入れたら、どうした拍子かあべこべに湯が面白くなり、何時までたつても「あがらない」「あがらない」といつてチャポ／＼やつてゐた。

男性美

美は生命の自由にして自然な發動である。そして生命の發動に種々雑多な差別があるかぎり、美にも亦いろいろの種類がある。其の中で、これを大きく男性美と女性美とに別つことは少くとも常識的には無意義なことではない。

男性美が積極的の美であるとすれば、女性美は消極的の美であり、男性美が雄大剛健を特色とすると見れば、女性美は繊細優雅を特色とするし、男性美が太陽や怒濤を聯想せしめ、女性美は月やいさゝ小川を思ひ浮ばしめる。

男性は何處までも男性的であるところに美を發揮する。然るに、近年性美は（ひとり男性美のみならず女性美も亦）甚だしく混亂し頹廢して來た。それは要するに、男性は男性の特色を減殺して女性化し、女性は女性の本質から遠ざかつて男性化して來

たからである。随つて、人間社會には純真なそして卓越した男性美（も女性美も）を視ることが少くなつた。そしてこれは吾々にとつて甚だ損なことである。何故なれば、凡そ性美は、兩性の關係を美化することによつて倫理化するものだからである。言ひ換へると、兎角は動物的になり兎角は肉慾的になり勝ちな人間の性的關係を、精神的な高潔な随つて幸福なものとするのは性美の力だからである。この意味で、私は性美の醇化を要望して止まない。男性美を益々男性化すると共に女性美を愈々女性化することの必要を痛感するものである。

x

「男が見て惚れるやうな男が本當の好男子であり、女が見て惚れるやうな女が本當の美人である。」——世間にはかういふ人が多い。私はこの言葉に一面の眞理を認めることは出来るが、これを全然眞理だとすることは到底出来ない。私は、やはり、女が見

て惚れるやうな男でなければ本當の好男子といふことが出来ないし、男が見て惚れるやうな女でなければ本當の美人といふことが出来ないとする方に一層多くの眞實があるやうに思ふ。但し、この場合の女を見る「男」も男を見る「女」も等しく男性又は女性としての資格を最も十分に具へた、眞に男らしい男又は眞に女らしい女を指すことはいふまでもない。

併し、一層嚴密な立場から考へて見ると、私には、惚れるか惚れないかといふことは性美の如何を批判する最高標準ではないやうに思はれる。勿論、男女を問はず、凡そ異性に對して美を感じた時には必ずこれに對して愛慾の情を起すものであるが、眞の美意識は性美の場合に於てもやはり超個體的であり、無私無慾でなくてはならないものである限り、眞に優秀卓絶した性美は、異性をして愛慾を超越させるものでなくてはならない。そしてこの點から見る時は、ひとり女性ばかりでなく男性にも美感を起させる男性が本當の男性美であり、同様に、ひとり男性ばかりでなく女性にも美感

を起させる女性美が本當の女性美であるといはなくてはならない。

x

垢面蓬髪

男性美墮落の證據の最も明白に現はれてゐるものは青年である。如何に女性化された、如何ににやけた、如何にかよはさうな青年の多いことよ。かういつたからとて私は決して垢面蓬髪、わざ／＼着物を破つて着たり、お天氣の日に朴齒の高足駄を穿いたりするやうな青年を好むものではないが、當今の青年には一見醜惡感を與へる程女性化したものが餘りに多い。この點から見て私は、少青年に美育を施すことを必要とするものである。

x

世の中には、角力を男性美の標本とするものと役者を男性美の代表とするものが

あるが、私は何れにも與しない。勿論、肉體が大きいといふことも膂力が強いといふことも、男性美の一要素一條件であるといふ點から見れば、角力にも男性美を見出し得るが、肉體が大きいといふことも膂力が強いといふことも、本當の意味に於ける男性美の單なる一要素單なる一條件に過ぎないばかりか、其の大きな肉體も美の一要素一條件として必要な調和均衡を缺いてゐる場合が多く、其の膂力が強いといふことも、美の一要素一條件として必要な複雑性を缺いてゐるもののみである點から見る時には、私は角力を以て男性美の標本とすることが出来ない。況んや、角力には、男性美の一根本要素たり一大條件たる精神的卓越性が殆ど全く缺如するに於てをや。角力をひびきする——角力を愛するものが大抵は精神生活の單調低級なものであることは、やがてこの間の消息を語るものといつてもよい。

役者は、或點から見れば角力よりは精神的に卓越してゐるが、而も其れは本當の意味に於ける男性美を構成する程の卓越性を具へてはゐない。其の肉體美に於ては勿論

角力どころか一般人にさへも劣つてゐる。偶々他人の美感を觸發するものは男性的なものではなくて寧ろ女性的なものである。所謂女の（低級な女の）惚れる男としての美である。併し、時としては、この役者——肉體的にも精神的にも卓越性のない役者からも恍惚として酔ふやうな男性美を感ずることがある。それは舞臺の上に於てである。そしてそれは藝の力である。腕の力である。

x

私は、男性美に於ては日本人よりも西洋人の方がはるかに卓越してゐると思ふ。單に性美ばかりでなく、西洋文明は東洋文明——少くとも我が國の文明に比してより多く男性的であるやうに思はれる。併し、日本國內に於ては、都會人よりも田舎人により多くの男性美を發見し得ることは、私の遺憾とするところである。何故なれば、男性美を構成する一要素一條件は知力——知的卓越性といふことだからである。

日本少くとも現代日本の文明が女性的であることの最も有力な一つの證據を、私は藝術に於て見出すことが出来る。由來藝術は人間性人間生活乃至文化の女性的方面に立脚してゐるものである點から見れば、現代日本の藝術が女性的であることは何等非難に價することではないが、只それが餘りに女性的である點に缺陷がある。殊に音樂に於てさうである。私が日本音樂で男性美を感ずるのは大薩摩のみである。但し、男性的の藝術が皆優れてゐるといふのでないことはいふまでもない。日本文化の改造をはからうとするものは、出来るだけこれを男性美化するやうにしなくてはならない。

男性美を缺くのはひとり我が國の文化ばかりでなく、我が國の自然もさうである。富士をはじめ名所といはれるものの多くは、決して十分な意味に於ける男性美を所有するといふことが出来ない。私がこれまで我が國の自然で最も強く男性美を感じたもの

のは、犬吠岬から太平洋を見た時である。

美は人生の花である。男性美は實を結ぶ花である。男性美は美しくしい力である。力強き美しくしさである。男性美こそは巧まざる美である。男性美こそは文字通に生命の自由にして自然な發動である。美を女性のことのみと思ふ者は未だ男性美を知らないものである。これと同様に、技巧や術から男性美が生ずると思ふものも亦未だ男性美を知らないものである。

眞に卓越したものは必ず他に美感を與へる。他に對して男性美を感じさせることの出来ないものは男子の恥辱である。——善美の一致は我が理想境である。

婦人の精神美

婦人は美の権化である。少くとも男子にとつて婦人が存在の價値を有する一個の理由は、美の権化たる點にある。どれ程聰明な頭腦を所有してゐても、どれ程卓越した技能を具備してゐても、どれ程高潔な心狀を懷抱してゐても、美的性質を缺く婦人は少くとも男子の全我的な敬愛の情を觸發することは出来ない。

世には肉體の美などはどうでもよいといふものも少くないが、私は決してさうは思はない。精神と肉體とが全然別なものでないかぎり、そして精神は必ず肉體を通して表現されるものであるかぎり、肉體が美であることは何等かの意味で精神が美であることの證據でなくてはならない。この意味に於て、私は所謂美人に對して好感と一種の敬意とを持つものであると共に、婦人が肉體美の保持と増進とに意を用ひることの

價値を是認するものである。只私がこの點に聯關して遺憾と思ふことは、婦人の美は肉體美のみにあると思つたり、或は婦人の肉體美を精神美の上位に置いて、只管肉體美の保持と増進とに浮身を窶し、甚だしきに至つては、肉體美の如何がやがて婦人の價値其のものであるかの如くに思つたりすることである。蓋し、斯くの如きは、婦人を單なる肉體的存在に墮し、婦人をして單に男子の玩弄物たらしめる所以だからである。婦人の價値を高めんとするものはこの點に對して明確な自覺を持ち、婦人をして先づ卓越した精神美の所有者たらしめることに依つて、一方では肉體美を精神化すると共に、他方では男性美の缺陷を補ひ男性美と調和を保ち、斯くして、人生乃至人類全體の美的價値の向上をはからなくてはならない。然らば、謂ふ所の婦人の精神美は果して如何なる場合に最もよく現はれるであらうか。この問に對して適切な解答を試みるには、何よりも先に婦人の精神美とは嚴密に何を意味するかを闡明しなくてはならない。

茲には美に關する私の見解を詳述する餘地は勿論ないが、私から見れば、婦人の精神美の特色は其の形式に於て消極的のところであり、其の内容に於て感情的なところにある。

婦人の精神美は消極的であるが故に、豪壯や偉大ではなくて繊細であり典雅である。貞節や犠牲や忍従や謙遜や従順や寡言やが婦人に於て精神美を意味するのはこれがためである。出しやばりや、お轉婆や、おしやべりが婦人の精神美を損ふのもこれがためである。羞恥や含笑やが婦人の精神美の象徴の如くに思はれるのもこれがためである。斯ういつたからとて、私は勿論、消極的な婦人の精神作用が凡て美であつて、積極的な精神作用が悉く醜であると思ふものではない。消極的な精神作用にも多分に醜があると共に、積極的な精神作用にも多分に美がある。因循姑息や優柔不斷や卑屈臆病や愚鈍無能やは事實必ずしも美ではないと共に、進取徹底や敏活果斷や勇敢剛毅や聰明多藝やは決して醜ではない。要は、どれ程積極的な精神作用でも、其れを

表現するに際して一味のひかへめが伴はなければ婦人の精神美とはならないと共に、消極的な精神作用と積極的な精神作用とを比較して見る時には、前者の方に一層多く婦人の精神美を見出すことが出来るといふのである。

翻つて思ふに、婦人の特色は、大率廣い意味で感情的なところにある。凡そ美は、いふまでもなく特色が最も自然に且適度に表現された状態であるかぎり、婦人の精神美の特色が感情的といふ點に存することは極めて當然なことである。勿論、婦人も男子同様人間であるかぎり、婦人の理知作用にも意志作用にも美と稱すべきものはある。殊に今日のやうな科學文明が進歩し、知識や學問が重大視される時に於ては、婦人の卓越した理知作用が美と見られる傾向は、刻一刻と顯著になり旺盛になりつゝ、ある。併しながら、婦人の精神美の中心精髓が廣い意味の感情作用にあることは、依然として否むべからざる所である。併し、婦人に於てはどれ程卓越した理知作用でも亦どれ程卓越した意志作用でも、單にそれだけでは美としての價値を十分に具へること

が出来なくて、それと優秀な感情作用とが諧和抱擁した時に於てのみ、眞に價値ある婦人美となるのである。そして婦人の精神美の一大特色が感情的といふ點に存するとは、其の發現の様式や過程が秩序的でなくて突發的であると共に、他人に強い感動を與へることに徴しても明かである。實に、表面的に見れば其れ自身には左程強い力が具つてゐないやうでありながら、而も其れを美と感ずるものに對して案外に強い影響を與へる所に婦人精神美の一特色が存するのである。古來、貞淑溫良な婦人がどれ程多くの男子を罪惡の底から救つたか。敬虔純眞な婦人がどれ程多くの偉人を激勵慰藉したか。人に知られない悲痛な婦人の犠牲的行爲がどれ程大きな貢獻を人道に對して致したか。思へば、一筋の黒髪が猶大象をつなぐに足るといふ言葉はやがて婦人精神美の特色を闡明した言葉であるといふことが出来る。

凡そ婦人が美の權化であり且精神が力であるかぎり、婦人の精神美は斷えず到るところに現れたものであるが、以上の理由から見て、私は、それが最も十分に現れるの

は愛に於てであると思ふものである。蓋し、愛は婦人の生命であるばかりでなく、婦人の愛の男子の愛と異るところは、著しく感情的であると共に偏に消極的なところに存するからである。

勿論、愛の中心要素が感情である點に於ては男子と婦人との間に差別がない。只男子の愛はより多く理性的であるのに對して、婦人の愛は最も徹底的に感情的である。婦人の愛は、盲目的であり直覺的であり白熱的であり純一無雜であるところに其の生命がある。婦人の愛は愛のための愛である。而も婦人特有の精神美の多くは愛と聯關する。愛の泉の涸れた婦人の何處に果して眞の美があるか。肉體的には寸毫の美もない老齡頹廢の婦人が、尙且強烈な精神美を發揮するのは大抵兒孫に對する愛に依つてではないか。少女の弟妹や人形や草木や禽獸やに對する愛が如何に彼女を精神的に美しくするであらうか。況んや人妻の夫に對する愛や母親の子に對する愛の力が、醜婦をして尙美婦を跪づかす權威を持たしめ、愚婦をして尙美の殿堂に昇るを得しめるの

は、世間周知の事實である。婦人の貞淑や温良や敬虔や羞恥や寡言や犠牲やが最も十分に精神美となる場合は、ひとり其れの根源に愛の力が脈々として動いてゐる時のみである。愛せんとする要求の涸れた老婦人や愛の對象を失つた寡婦老嬢やには、悲痛があり寂寞があり崇高があり得るけれども、眞の精神美はあり得ない。然り、婦人は愛し愛される限りに於てのみ眞に美であり、随つてまた、婦人に於ける愛の泉の枯渇はやがて精神美の凋落である。

併しながら、婦人の愛が積極的に發動するところには眞に力強い精神美の出現を見ることが出来ない。妖婦の愛や良妻賢母を賣物にする婦人の愛に精神美が伴はないのはこれがためである。婦人が轆轤不遇の境涯にありながら、夫や子のために一身を犠牲にし、夫を愛し子を愛することを以て唯一の生活意義とし最高の生活幸福とする時に於て、婦人の精神美ははじめて其の三昧境に到達することが出来るのである。この意味に於て、婦人の精神美は、一味の悲痛深刻を伴ふ時に最も力強きものとなるとい

はなくてはならない。これ私が、婦人の精神美の一特色が消極的といふことであるとした一つの理由に他ならない。

思ふに、今日は或る意味に於て婦人美の墮落時代である。そして、婦人美殊に婦人精神美の墮落はひとり婦人の不幸であるばかりでなく男子の不幸である。勿論嚴密にいへば所謂美が人生の全體でも最高價值でもないかぎり、美の墮落は直ちに人生そのもの乃至人生全體の墮落ではないが、美が人生の一大分野であり最高價值の一本要素であるかぎり、美の墮落は決して等閑に附すべきものではない。殊に婦人は人類の半を占め、且婦人の一大特色が美にあるかぎり、婦人美の墮落は現代文化の一大缺陷でなくてはならない。この意味に於て、私は、婦人美の保持と向上とを以て焦眉の大問題とするものである。

然らば如何にすれば婦人美の保持と向上とをはかることが出来るであらうか。勿論これには幾多の方途手段が存するであらうが、何よりも必要なことは、婦人美の精髓

は精神美にあることを自覺すると共に、婦人の精神美を尊重し、随つて先づ精神美の涵養と發現とに力を盡すやうにすることである。但し、この點について注意を要する一事は、美も時勢と共に進歩すべきものであるから、精神美の向上をはからうとするものは、それを現代に適切なやうに改造しなくてはならないといふことである。然らば、謂ふ所の現代に適切な婦人の精神美とは果して如何なるものであらうか。一言にすれば、在來の消極的なものに比してより多く積極的なものであり、在來の感情的なものに比してより多く理性的なものである。但し、この點を十分に闡明するには詳細な論議を要するから今はこれだけに止めて置く。

原敬氏の暗殺

□

或る意味に於て、死は極めて平凡な事實であるのに、原敬氏の死が特に吾々に大きな驚異を感じしめるのは何故であらうか。いふまでもなく、それは、原氏の死が文字通りの死ではなくて暗殺だからであると共に、原氏其の人が時めける現内閣の首班だからである。

□

號外の配られない不便な高臺に住んでゐる私は、原氏暗殺の翌朝、新聞の配達が餘り遅いので、「又何かあるな？」と思つてゐたにも係らず、新聞を開いて「原首相暗殺」の大きな見出しを見た時には、ほんの瞬間ではあつたが、グ、と息がつまる程の驚異を感じた。そして一通り事件の真相がわかると私の瞳は熱い涙で一ぱいになつた。私は何よりも先づ「人生の果敢なさ」をしみくゝと感じた。私は何よりも先づ人間の命の露よりもろく、人生の變化の電よりも迅いのを、今更の如く心から悲しく思ふのであつた。私は暫らくの間、只々原氏の不幸を悲しんだ。そして、「私自身が若し昨夜暗殺されてゐたら」といふことに思ひ及んだ時に、目がくらむやうな感じがした。

□

死！ 私共はふだん死に對して餘りに冷淡である。そして死に對して冷淡なことはやがて生に對して冷淡なことである。本當に生を愛するといふことは、一方に於て

は、出来るだけ長く生きることと力めることであると共に、他方に於ては、出来るだけ永き生きることをして出来るだけ價值多く生きることと意味させるために、常に今死ぬ覺悟で乃至何時死んでもよい覺悟で、刹那々に自己の最善を效すことである。永遠に、そして無限に、よりよく生きんとする要望があつてのみ、私共は眼前當面の苦闘に堪へ得ると共に、常に刹那に永遠を認め、過程を究極と觀じて斷えず最善を效す人のみ、眞に意義ある生活を營むことが出来るからである。私はこの意味で、家を出る時には何時もこれが家の見納めであると覺悟した山鹿素行の心事も、將に斷頭臺上の露と消えようとする刹那にも自己の生を愛惜して、「持病に有害だ」といふ理由で刑吏のすすめる柿を食はなかつた石田三成の心事も、表面こそ全然矛盾するやうではあるが其の根柢に於ては揆を一にするものだと思ふ。さうだ。「何時死んでもよい」といふことと「何時までも死にたくない」といふこととが渾然として統一した時に、私共の生活は始めて眞生活——創造生活の三昧境に入るのである。私は、この點から見

て、乃至この意味に於て、人間としての原氏に感歎するものである。

原氏が暗殺——少くとも不慮の死を豫期してゐたことは其の遺書に徴して明かである。最近に於ける氏の生活態度が常に一貫して強かつたのは、一つはこれがためである。氏はこれまで反對者から老獪を以て、惡辣を以て、冷酷を以て、強情を以て、極力非難されて來た。そして、この非難には少くとも一味の眞實が含まれてゐる。併し、自己に忠なることが乃至全我的であることが道德少くとも誠實の一要素であるかぎり、原氏を徹頭徹尾不道德又は不誠實を以て難することは出來ない。氏は寧ろ不聰明を以て難ぜらるべき人である。不聰明であるが故に不誠實であると難ぜらるべき人である。氏が忠實ならんとする自己が、小さな誤つた自己であることを知らなかつたからである。氏が忠實ならんとする自己が、黨利や舊式政治家と相即する自己であることを知りながら、それを打破する途を知らなかつたからである。

私は、原氏は遂に救はるべき人だと信じてゐた。翻然として自己の非を悟り、超然

として俗事を脱却し、光風霽月の純な生活に入る日のあることを確く信じてゐた。黨利とか黨勢とかいふ小さな誘惑を一擲して「人」として純な、澄んだ、そして味はひの深い生活に入る時の來ることを心から待ち望んでゐた。私は、此の度の兇變によつて私のこの信念と要望とが眞實であることを立證する日を永久に喪つたことを、私自身のためにも原氏のためにも衷心遺憾に思ふものである。」

□

世には、原氏の暗殺に憤慨する餘り、警戒の不備や警戒者の怠慢を難するものも少くないが、これは斷じて不當である。苟くも企んで人を殺さうとするものゝあるかぎり、又其の殺さうとするものが命を賭けてゐるものであるかぎり、どんなに警戒を嚴重にしても、所詮完全に防ぐといふことは不可能だからである。私は、原氏がこの點を理會してゐるために、身邊に危険の近づいてゐることを知りながら、警戒などに重

きを置いてゐなかつたことを悲痛に感ずるものである。併し、警戒の局に當つたものが、自分の任務を果し得なかつたことに責を感ずるのは當然である。新聞紙によれば、有力な一當局が原氏の死體を前にして號泣哀哭してゐたのを見た、一老政治家が、「泣いてばかりゐないで何處かに行つて責任を果せ！」と叫んだところが、其の意味が其の當局に通じなかつたのであるが、眞偽は知らず、さもありさうなことである。他人の身命を守らうとするものは何時も自分の生命を賭してかゝらなくてはならない。自我意識の強い、そして俸給制度の今日の警吏の凡てにこの意味の警戒を望むことは出来まい。

□

原氏が遺書を認めて置いたといふことはかなり世間を動かしたらしい。それと共に、遺書の内容其のものも亦かなり世間を動かしたらしい。

私は、本來遺書を認めるといふことを好まないものである。殊に自殺の場合に於てさうである。死後の毀譽を惧れる程なら死なない方がよい。自らの自由意志で死を選ばず、死後の毀譽を超越するがよい。但し、原氏の場合は勿論これと趣を異にするから必ずしも非難すべきものではない。原氏は遺書を認めることによつていはゞ生活に背水の陣を布いたのである。生活態度を嚴肅にするために遺書を認めただのであつて、人に見せるためのものではない。世間では、遺書の内容が葬式のことのみに限られてゐることを物足らなく思ふやうにいふものも少くないが、私は反對にそれだからよいのだと思ふ。氏があの遺書を認める時の心は、只偏に自己そのもの原敬そのものにのみ集中されてゐた。當時の氏の胸奥には政黨のことも政治のことも國家のこともなくて、偏に自己そのものの葬式のことのみが關心の對象となつてゐた。それなればこそ、あのやうに透徹した遺書が認められたのである。

遺書の項目中私の最も興味深く感じたのは、葬式を夕方營めといふことである。理

窟つぼい氏の性格と素漠な氏の生活とが、氏の全性格全生活ではないことが、これによつて證明されたからである。「政治家」といふ名稱のために、氏に於て最も大きな長所であつた「人間らしさ」又は「温み」が、これによつて最も有効に表現されたからである。

墓標に「原敬之墓」と記すこと、死亡廣告に「死去」の文字を用ゐること、葬式を簡素に營むべきことなどの項目は、原氏を知るものにとつては一向珍奇なことではないが、それだけまた氏が自己に忠實であること乃至氏の生時の生活が氏にとつて眞實なものであつたことを雄辯に立證するものである。世には、これらの項目を以て、時弊又は現代人心の弱點に對する一大教訓であるとするものも尠くないが、私は必ずしもこの見解を排斥しない。只論者が若し一歩進めて、原氏が時弊を匡救せんがため、又は現代人の反省を促さんがために、これらの項目を遺書中に認めて置いたとするならば、私は斷じてこれに與することが出来ない。原氏は徹頭徹尾自己一人のこのみ

しか考へてゐなかつたのである。そしてこれを思ふと、私は無限の寂寥を感じずにはゐられない。「人間は結局只一人である」といふことをしみくゝと感ぜずにはゐられない。

原未亡人が幾多の誘惑を排して遺書に殆ど完全に従つたのは當然のことながら兎に角快いことである。葬式を祭禮同様に考へてゐるやうな不真面目な人間が一人も會葬することが出来なかつただけでも、氏の葬式は氏の性格と生活とにふさはしいものであつた。

□

併し、私は再びいふ、遺書を認めて死ぬのは私の好まぬことである。遺書を認めるといふことは、死に、そして自己に囚はれた證據だからである。殊に原氏の遺書の内容のやうに、單に一身上のことであれば、遺書によらないで平素の言行によつて近親

に自分の要求を傳へて置くことが出来るものに於ては特にさうである。私の信ずる所に従へば、只生時に於て自己の最善を盡し、死後の如きは一切他人に任せて意に介しない様であつてこそ、始めて真人といふことが出来る。但し、結局世俗の人たる原氏にこれを望むのは勿論望むものゝ無理である。この意味で、私は只原氏の遺書の内容を通して原氏に敬意を表するのみである。

□

正氣で人を殺すといふことは決して容易なことではない。殊に、首相といふやうな人を而も警戒のかなりに嚴重な場所で短刀に依つて殺すといふことは決して容易なことではない。少くともそれは命懸の仕事である。血氣に逸る青年でなければ出来ないことである。私は兇行者中岡の胸奥に想到するといはうやうなき感慨に打たれる。彼が他人の教唆に依つてあの行動を敢てしたかどうかは知らないが、兎に角、成功する

にしても失敗するにしても自分の命がないことだけは豫め覺悟してゐた筈である。而も動機は決して利己的のものでなかつたことは、彼が兇行を演じた後直に發した彼の言葉に依つて明かである。彼は彼としての最善を盡さうとしてあの兇行を敢てしたのである。そしてそれが誤謬であり非行であつたのを彼は知らなかつたのである。そこに悲劇の原因がある。吁、世に命がけで悪事を行ふこと程悲痛なことがあらうか。聞く所に依れば、彼は翌日の新聞が彼を稱揚してゐないといふことを耳にして失望落膽したとのことであるが、眞偽は知らず、さもあるべきことである。恐らく彼は時を閱するに従つて自己の行爲を悔ゆる念が益々強くなつて行くであらう。随つて、もし萬一にも噂の如く、彼の背後に教唆者があつたとすれば、それは、道徳的には彼以上最も多く非難さるべきものである。

□

人間の他人に對する生活態度は、私から見れば、大凡二通りある。個人としての他人に對する態度と、團體としての他人に對する態度とである。そして前者は更らに三つに別つことが出来る。優強者に對するものと、劣弱者に對するものと、同等者に對するものである。第一のものは敬であり、第二のものは愛であり、第三のものは戦に即する愛である。これは勿論正道であつて、この他には權道があり得る。強者ではあるが優強者ではなくて惡強者ともいふやうな相手に對する態度である。然らばこの態度は果して何であるか。私から見れば、それはやはり一種の戦でなくてはならない。そして相手が暴力を以て自己に臨み、暴力を以て自己の生命を脅かす以外には、たとひこの種の相手に對しても斷じて暴力を用ふべきものではない。何處までも公明正大な方途を以て戦ふべきものである。

人には人を殺す權利はない。徹頭徹尾惡人であつても、個人がこれを殺すことは一惡を除いて一惡を増す所以である。況んや原氏の如く、たとひ幾多の失態缺陷があつ

ても、一個の人間として相當の價値を具有するものを殺すことの悪いのはいふまでもない。殊に、暗殺といふが如き最も卑怯な方途によることは極力憎むべきことである。原氏を衷心憎惡するならば、公明正大な方途を以て氏の精神生活に打撃を加ふべきである。一部を殺すことによつて全體を活かすべきである。

凡そ破壊は、其れが建設の動因となる時にのみはじめて意義を有する。破壊のための破壊とか絶對的破壊とかいふことは其自身矛盾的用語である。暗殺といふが如きは、建設的要素の甚だ少い、殆ど絶對的破壊ともいふべき極端な破壊である。私は文明の今日、斯くの如き野蠻時代の現象が續出するのを衷心悲しむものである。

私は暗殺を排すると共に、暗打や、中傷讒言や、流言蜚語や、暗中飛躍やを排するものである。そして我が政界にはこれらの醜惡な現象は餘りに多大である。前期議會中に起つた所謂「珍品事件」の如きも、この意味に於て私の甚だ不快とするものである。尙この點に聯關して想ひ起すことは、我が國の政争の醜惡なことである。團體的

政争に於てさへもさうであるが、殊に個人的政争に至つては殆ど見聞に堪へない程醜悪である。たとへば、議會に於ける野次や選挙の際の言論戦の如きは、徹頭徹尾人身攻撃であり、低劣な感情の應酬である。これを直接間接に見聞する民衆殊に客氣の青少年が、不知不識の間に、自己の反感を持つ黨人や政治家を以て人非人と思つたり、甚だしきは亂臣賊子と考へたりするやうになるのは、遺憾ながら理の當然である。原氏の暗殺者が兇行を演じた動機原因が那邊に存するかは、固より私の知悉し得ないところではあるが、心ある政治家は宜しくこれらの點をも考慮し、この不時の機會を利用して、政争の改善をはかることに力めて欲しいものである。この點から見て私は、原氏の兇變に對して取つた憲政會の態度に聊か敬意を表するものである。

□

この度の事件に於て、私が今更の如くしみくと痛感した一事は、日本の政治が、

民衆や青年と甚だ交渉のうすいといふことである。一見すれば、兇行者中岡が、無名の一民衆でも一青年である點が、我が國の政治が、民衆と青年と密接な關係を有する證據のやうに思はれるが、實は、これと正反對であることを、最も雄辯に證するものであることを、識者は思はなくてはならない。

□

原氏の暗殺が安田翁の暗殺に亞いで起つたことは聊か注目すべき意義がある。今日大多數國民の最も深い注意を惹いてゐるのは經濟生活であり、これに次ぐのは政治生活だからである。心ある富豪や政治家は、單にこれを一個人のことのみ考へず富豪としての自己の生活状態、殊に民衆に對する態度について深い反省を用ゐなくてはならない。兇行の當夜、中橋文相が一旦出た驛長室にまた戻つて裏口から暗に消えたといふ新聞記事を見て、私はいはうやうのない寂寥を感じた。聰明な人達は、何時迄

も此の度の大事件に驚倒してゐずに、其の事件の背後に横たはる深い意味と大きな教訓とを心讀味解すると共に、其の根本原因を探究し、且それに對する根本匡救策を講ずるやうにしなければならぬ。

由來斯やうな野蠻時代の現象が今日續出するのは、今日の社會状態の何處かに野蠻時代と共通する點があることを立證するものである。そして斯くの如き野蠻性乃至野蠻性を根源とする思想感情は案外に傳染性の迅速強烈なものであるかぎり、朝にあるものと野にあるものを問はず、苟くも先覺者を以て任ずるものは、これに對して最も慎重な態度を取り、最も聰明な方策を講じなくてはならない。そして謂ふ所の最も慎重な態度及び最も聰明な方策といふことは「積極的」といふことを一要素一條件とすることを忘れてはならない。この意味に於て私は、この際特に學者思想家及び教育家操觚者の自覺と奮起とを要望して止まないものである。

□

世には、この事件を時代の反映であるとか新思想の歸結であるとか見るものも尠くないが私は斷じさうは思はない。勿論、この事件はたしかに時代の一反映乃至一時代相の反映ではある。けれども、これを以て文字通に現代の反映と見るのは現代に對する盲目者の盲斷である。現代は少くとも現代の基調はこの事件と殆ど正反對するといつてもよい。問題は、斯くの如き本質的には時代錯誤的な事件が現代に於て堂々と生起發現するところに、現代が生起發現に機會を提供したところに現代の缺陷があるといふ點に存するのである。識者は、現代が斯くの如き時代錯誤的事象の發現に其の機會を提供した原因を觀破しなくてはならない。

兇行者の思想は斷じて時代後れの舊思想である。それは、彼が暗殺といふ手段を選んだ點にも顯れてゐるが、寧ろ彼が原氏一人を殺さへすれば問題が解決すると見た

點に最も顯著に表白されてゐる。たしかに兇行者は傳統的な英雄崇拜觀に囚はれた舊思想の保持者であつた。彼は、原氏をえらいと思つたからこそ殺したのである。彼が兇行の刹那に非常に得意になつたのは、非常にえらいものを殺したのが非常にえらいことだと意識したからである。この意味に於て、彼は憐れむべき舊思想の犠牲者である。そしてこの點は、即ち彼をして原氏をかやうに思はしめた點は、原氏をして政友會の一枚看板たらしめた政友會全體の眞面目に反省すべき點である。

□

原氏亡き後の政友會が、西園寺公にすがりついたのは、一應の禮儀としてはよいことであるが、本氣の沙汰であるならば、時代後れの酷だしいものである。首相も總理も黨から選出して、結束協力自黨と政局とを收拾すべきが當然である。但し、この際に黨内の若手連中が一旗擧げようと企てたのは先づ諒とすべきであるが、老齡頹廢の

連中が古參や舊功を口實に權力争ひをするが如きは沙汰の限りである。策士といふ連中が所謂暗中飛躍といふものをやつて、少しでも名を新聞紙上に記されようとするが如きは、何時ものことながら嘔吐を催す醜陋事である。

亡き人を愛惜敬慕することはよい。亡き人の偉大優秀を稱揚することはよい。併しそれが極端に走つて、原氏に亞ぐ大人物が一人もないと思つたりするのは非常な謬見である。今回のやうな非常事の起つた機會にこそ、徹底的に自由な觀察と反省とを用ひて政治の進歩に資すべきである。原氏は、或る意味ではたしかに偉大な人ではあつたが、現代の政治家としても現代人としても決して偉大な人ではなくて、既に盛りを過ぎた人である。たとひ今後百年の長壽を保つとしても、必ず近い將來に於て新人に其の地歩を譲ることを最も眞實とする人である。政友會が單なる私黨でない限り、有爲なる政友會員は寧ろこの點に就いて透徹した理會を持たなくてはならない。若しもこの大事な點を忘れて、原氏より一層舊い人達に活動の機會を與へるやうなことがあ

つたなら、それこそ原氏を喪ふ以上の大損失である。政友會が原氏の死をして犬死たらしめない道は、この機會に於て自黨及び政界に清新な風氣を通流させることによつて國民生活の本質的發達を促進することを他にしてはない。

□

世には、中間程度の舊思想のものが甚だ多い。原氏と政友會とを同一視するもの、及び原氏と政友會とを異別視するものは、皆この舊思想の所有者である。原氏は政友會の重鎮ではあつたが、政友會の一員であつた。原氏が政友會員中ずばぬけてえらかつたことは原氏の名譽であつて政友會員各自の名譽ではないが、而も原氏をして兎も角もあれだけ活動するを得しめたのは政友會である點から見れば、政友會あつての原氏である。随つて政友會そのものに實力があれば、原氏亡き後は第二第三の原氏を作り得る筈である。政友會員がこの點を忘れてゐればこそ黨外から人を備つて來ようとする

したり元老にすがらうとしたりするやうな愚舉に出づるのである。原氏の死去を以て直ちに政友會の凋落と見て、内閣乗取策を弄したりする人達も亦舊思想の所有者たる點では、多數政友會員と五十歩百歩の差である。

□

世には、原氏の死を以て日本の非常な損失であるとするものと何等の損失ではないと見るものとあるが、私はその何れにも與することは出来ない。

□

原未亡人が原氏の遭難を聞いて涙一滴流さなかつたことを稱揚するものがあつたが、私は必ずしも稱揚に價することだとも思はないが、氣の毒な人だとは思つてゐる。偉い夫に後れた未亡人の生活がどれ程みじめだかを知つてゐるからである。原氏が遺

言まで書いて死體を埋葬した盛岡を葬儀終了後間もなく去つた彼女の心事を思ふと、私は一層深い寂寥を感じずにはゐられない。

□

原氏が死んで誰が一番悲しんだか知らないが、兎に角悲しんだものは非常に多いであらう。併し、其の悲しみは果してどれ程純乎たるものであり、どれ程美しいものであり、どれ程眞實なものであらうか。これまで原氏によつて一身上の利益を受けてゐたもの、又將來うけようとして長い間苦勞をしてゐたものも非常に多く、且彼等も亦或る意味では原氏の死を心から悲しんだことであらう。けれども、それは果してどれだけ價值ある悲しみか。吁、悲しきは晩秋の夕暮よ、奇しきは大立物の死よ。

丹那隧道の惨事

□

天災とはいへ、この惨事を仕出かしたことは何よりも遺憾である。私は、九死に一生を得た人々の幸福を喜ぶと共に、永しへに救はれなかつた其の他の犠牲者の不幸に對して萬斛の熱涙を灑ぐものである。

□

人間の眞價殊に其の精神的修養の價値は、不慮の變事に遭遇した時に最もよく現はれるものである。珍品問題の内田某が汽車で遭難した場合に何といつたか。武士道の

權化山鹿素行が幕府の忌む所となつて赤穂に流されることになつた當時、彼は係役人の間に對して何と答へたか。私はこの點から見て、この慘事の生存遭難者諸氏の態度に對して衷心敬意を表せざるを得ない。そして私が諸氏の行動について最も深く感じたことは、變事に際會しながら聊かも狼狽せず、不幸に遭遇しながら尠しも人をうらまず、長時日の間苦痛を嘗めながら悲觀しないで、遂に全部救済の幸福を見るに至つた聰明と高潔と勇氣とである。これは勿論、十七名の人達の凡てが尊敬するに足る人格の所有者であつたためであるのはいふまでもないが、主として監督者飯田技手が卓越した人格の所有者であつたためであることも亦否むべくない。

□

飯田技手は、聰明と責任感の強いことゝに於てたしかに尊敬すべき人である。氏は、この災厄に遭遇するや、一方では、遭難者だちを激勵し慰撫し指揮して救済の日

の近づくを待つたと共に、他方では、死の扉の前に立ちながらかすけくまたしく燈の前で靜かに日記を認めてゐたではないか。而も其の日記には「時事新報」に依る救済された際の手當まで詳細に書いてあるのを見ても、氏が如何に優れた聰明と強い責任感との持主であるかを推察することが出来るではないか。氏の責任感が如何に強かつたかは、この他、弔詞をすらも作成し、且其の中に「一は天災の不可抗力とは云へ、一は我々監督者の責亦少しとせず、」といつてゐること、及び日記中に、送風管によつて食物の運搬がないことは返すくも遺憾なことであるとしながら、特に「後日の爲め特に此點に注意あらんことを」と記してゐることに徴しても理會し得るところである。不慮の災厄に遭遇して自殺することは、難事に似て恐らくはさほどの難事ではあるまい。併しながら、それは眞に責任を重んずるものゝすべきことではない。飯田氏が當面のことに對して最善をつくすのはいふまでもなく、死後のこと又は救済後の手當のことまでも詳細に記して心靜かに大きな運命のさばきを待つてゐたのは、たしか

に人事を盡して天命を俟つ哲人の風格の具有者であり、眞に人の上に立つものとしての責任を重んずるものといはなくてはならない。私は繰返して氏に敬意を表するものである。

□

飯田氏の手記に依れば「大谷よく命を重んじ再度信號に行く、一般の元氣を増す、大に感謝す、努めて一般の元氣にあらん事を心がけ、我より元氣充滿慰撫に努む」とある。聰明であり勇敢であつたのはひとり飯田氏のみでなかつたのは益々嬉しいことである。藁を噛み水を掬ひ追分節を唄ひながら互に慰め合ひ互に勵まし合ひ、斯くしても尙寂寥と悲哀とに堪へ兼ねるや、神佛に祈願しながら一人も死者を出さなかつたのは、諸氏にとつて無限の悲痛であると共にまた無極の誇りである。殊に感激の涙なくして讀むことも聞くことも出来ないのは、門屋工夫の遺言である。僅に二十六歳の青

年の身を以て死の黒淵に佇立しながら、而も「責任上喜んで死の道に上る」といふのみか、妻に對して衷心感謝の意を表すると共に其の後半生の幸福をいのり、更に二人の弟（であらうと思ふが）の無事を祝福し、親分や郷里の親兄弟を思ふ氏の心事は、只々悲痛の二字を以て形容する外に道はない。私はこの夫、この子、この兄弟、この子分を再びまのあたり見ることが出来た人達の幸福を思ふと、ひと事とは思はれぬ程の嬉しさを感じるものである。

□

救済された際に一工夫は、埋没地の長さや其の他から推して必ず今日は救済されることと思つてゐたと落ちついて話したさうだが、聰明と勇氣とを持つてゐるのは決して飯田技手や門屋工夫のみではなかつた。それにしても推稱すべきはひとり遭難者のみではない。全力を傾けて救済工事に努力した人達も亦尊敬すべき人達である。就

中、七日間不眠不休で働いた五十有餘の某老工夫の如きは、如何程褒めても褒め過ぎるといふことはなす。

□

遭難事件はいふまでもなく惨事である。併しながら、この惨事の上に記した如く幾多の美はしいことが存在するのは悲しき愉快である。殊に、近頃の労働者は兎角世間の非難を受けるやうな時に於て、工夫たちの間にこの美はしい現象を見るのは私の極りなき喜びである。日本人は兎角死殊に自殺を讚美し過ぎる傾きがある。少くとも、變事の際會して善後策も講ぜず、只一旦の感激から死に就くことを以て最も責任を重んずるとするのは斷じて謬見である。それにしてもこの災厄は果して眞に不可抗不可防の天災であつたらうか。私は、死者を弔ひ生者を慰めると共に、この災厄の原因を探究し且公表して、斯かる不祥事を再びせざる工夫を講ずるやうにすることは、

關係者一同が眞に自己の責任を果す所以であると思ふ。

□

最近「責任」の語は頻々として繰り返されるにも拘らず、實際に於ては責任迴避の言動を聞睹することが甚だ多い。十七氏の行動がこの現代の一大缺陷を匡救する上に幾分でも貢獻することがあるならば、それは斷じてひとり十七氏の光榮のみではない。この意味で、本誌のこの度の企に衷心敬意を表すると共に、教育家や社會改良家がこの事件を最も有効に取扱はれんことを要望して止まない。

演説と文章

□

思想表白の方途は表情身振言語文字である。其の中最も完全なものは廣義の演説と廣義の文章とである。随つて、苟くも思想表白に關係ある職務に就くものは、この二つについて十分な注意を用ゐなくてはならない。實に雄辯と能文とは思想に關係あるものにつけて缺くべからざる二大武器である。

然るに、我が國に於ては古來この思想表白の二大武器の價值が理會されず、これらに堪能であることは寧ろ小人の特質であると見なされた程である。殊に演説に於てさうである。これは「言明行敏」を旨とする儒教の主流主義に伴ふ弊害である。議會政

治實施の今日に於ては、最早この種の謬見を懐くものは殆どない筈であるに係らず、實際に於ては決してさうではない。少くとも演説については誤つた考を持つてゐるものが思想家にさへ依然として少くないのは、不思議らしくない不思議である。即ち、彼等は能文家を尊敬するにも係らず、雄辯家は概して人格が低劣であるが如く考へてゐるのである。これ程没批判的なことはない。雄辯と能文とは其の機官を異にするだけであつて、其の價值は全然同一だからである。勿論、時によつては兩者の間に優劣長短の差異はあるが、少くともこれを全體から見れば、決して一を取つて他を捨つべきものではない。この意味に於て、私は苟くも思想表白に關係ある職務に就くものは、雄辯家であると共に能文家であるやうにとめることの必要を力説高調せざるを得ないものである。以下、この思想家の二大武器について思ひついた事を列記して讀者諸氏の一榮に供することとする。

雄辯家は必ずしも能文家ではなく能文家は必ずしも雄辯家ではない。この二大武器を具へたものはたしかに幸福な人である。併し、これらの一に長じて他に短であることは、先天的の原因に由るよりは寧ろ後天的の原因に由ることが多い。出来ないのではなくて、しないのが多い。事實大抵な人は、少くとも一方に長じた人は、修養練習しなへすれば必ず或る程度まで他方に秀でることが出来る。

演説の長所も短所も、主として感覺にうつたへる所にある。聴衆に深い感動を與へた演説が必ずしも内容的に優れたものでないことが多いのはこれがためである。論理整然とした演説よりも、脱線したり與太を飛ばしたり卑近にして具體的の例を澤山舉

げたりする演説が聴衆を喜ばせるのもこれがためである。演説に抑揚が必要なのもこれがためである。演説の趣旨が誤解されて言句の末節のみが記憶されたりするのもこれがためである。當局が文章よりも演説を危険視するのもこれがためである。(これは、この他群集心理作用が手傳つたり、言論を直ちに實行化する可能性が多かつたりすることも含まれてゐる。)長い演説よりも短い演説が成功し勝ちなのもこれがためである。演説の成否が内容よりも形式殊に音聲や態度に關係することが多いのもこれがためである。

随つて、演説をするものも演説を聴くものも、文章を書く時又は文章を読む時とは違つた態度を取らなくてはならない。價値のある演説をする者は、少くとも第一に、聴衆の力量程度を知ることが必要である。第二に、重要な問題は出来るだけ用心して取扱ひ誤解を惹起するやうな話し振りをしてはならない。第三に、論旨——演説の主眼點を明白に理會させることに力めなくてはならない。第四に、徒に聴衆の感覺にのみう

つたへることをせず、演説が終つた後で考へて見るだけの餘韻を残すやうにしない。第五に、熱するはよいが興奮しないやうに注意しなくてはならない。その熱も刻一刻と高くなるやうな熱でなくてはならない。第六に、自分の音聲や聴衆の力に適切な程度の時間内で切り上げることが必要である。長さに失するよりも寧ろ短い方がよい。第七に、出来るだけ易解を旨としなくてはならない。第八に、拍手喝采の有無多寡を以て成否を卜する標準としてはならない。眞の雄辯は聴衆が拍手喝采をすることが出来ない程深く感動する底のものであることを忘れてはならない。

□

文章の長所も短所も、主として理知にうつたへる所にある。文章は読み返すことが出来るから、演説よりも難解であつてもよいのはこれがためである。演説に抑揚が必要な程文章に傍點やアンダーラインが必要でないのもこれがためである。文章が何等

の引例をしたり與太を飛ばしたりしなくとも、或は倒に博引旁證しても、必ずしも文章としての價値を損じないのもこれがためである。演説には演説者の人物がさながらに現はれるのに對して（文は人なりといはれてゐるにも係らず）、文章を以て其の人となりを正しく判断評價することがかなり困難なものもこれがためである。文章の價値が演説に比して形式よりも内容に一層多く依存するものもこれがためである。善惡共に、演説が聴衆に與へる影響よりも文章が讀者に與へる影響が、一時的には薄弱であるが結局は強烈であるのはこれがためである。眞に自己の思想を正しく他人に傳へ、思想に依つて世に貢獻しようとするものが、演説よりも文章を選ぶのもこれがためである。

□

演説はやり直しが出来ないが文章は書き直しが出来る點に於て、演説をやる時の心

持は文章を書く時の心持よりも一層緊張してゐる。演説の成否は直ちに目前刻々に反證されるが、文章の成否は長時間の後でなければわからない（時には永久にわからないこともある）點に於ても、演説をやる時の心持は文章を書く時の心持よりも眞剣である。併し、半面から見れば、それだけ演説をやる時の心持が文章を書く時の心持よりも不純になり勝ちである。演説には場當りが多かつたり聴衆の甘心を買つたりする場合が文章よりも多いのは其の證據である。生真面目な人や憶病な人が演説をさらふ一つの理由もたしかに茲にある。随つて、この點から見れば、文章に於て正直に大膽に自己の思想を表白するものよりも、演説に於て正直に大膽に自己の思想を表白するものゝ方が一層尊敬すべき人格であるといふことが出来る。

□
演説は、やり直しが出来ない點に於て、文章に比して一層藝術的であり一層創造的

である。この意味に於て、演説の本當の面白味は即席演説にある。何等の準備もなしに突然演壇に立つて、ポツリ／＼自づと湧き出て来る思想を靜かに聴衆に傳へてゐる中に、油が乗つて来て次第に熱を帯び、次第に深味を加へ、平素自分さへ氣がつかなくなつた思想が渾々と湧いて来るやうな演説が本當に面白い演説である。同様の意味で、演説で最もつまらない演説は所謂「朗讀演説」である。

□
演説を劇にたとへることが出来れば文章は小説である。演説の修養と文章の修養との間には、俳優の修養と小説家の修養との間程の差異があることを忘れてはならない。

□
水ばかり飲んでゐる演説は多くは失敗であり、原稿紙の書き損じの多い文章は多く

は出来が悪し。

□

演説の優劣が一番よくわかるのは同一演題で多勢演説する場合である。七八人も同一題で演説した後でもよく聴衆を謹聽させるに足るやうな演説が出来る人でなければ、本當に尊敬するに足る演説家といふことが出来ない。これは文章に於ても略同一である。所謂合評といふやうな場合がそれである。

□

演説は須らく華やかなるべし、文章は須らく澁味あるべし。これが私の演説と文章とに對する心持の一つである。

講演旅行雜感

私は七月の末から八月の末まで約一ヶ月の間、長崎、兵庫、愛知、埼玉、秋田の五縣に亘つて講演旅行をしました。長さに於ては日本の大半を旅行したことになつた譯で、随つて自分の一身にとつては少からぬ利益を受けました。今此の度の旅行を廻想するに際して、何よりも先づこの幸福を享受することの出来る機會を與へて下さつた講演會當事者に對して衷心謝意を表したいと思ひます。以下、本誌の慇懃に従ひ、この講演旅行中に感じたことを卒直に話して見ることは、最も嚴密な意味で謝意を表することになるかと思ひます。

第一に感じたことは、地位も低く、立派な肩書もない私のやうな一個の學究を、遙々又態々招いで自由に思ふところを話さして呉れるやうになつた教育界最近の空氣に

對して、快感を覺えるといふ點であります。併し、親しく各地方に行つて見ますと、ほんとうに私に對する興味や要求が充實して、隨つて又私の思想や人格を理會した上で話をさすといふのではなくて、會員中の少數者だけが私を待つて居るといふやうな場合もないではなかつたやうに思ひますが、これは單に私一人の問題としてではなくて、講演旅行をするもの、誰でもが、共通に感ずる不滿ではないかと思ひますが、併し、結局本當に自己を知つてくれる者は少數者であるといふこと、その少數者が——而もそれは大抵若い人達であるが——多數者を動かしたといふことを考へて見ますと、どの講習會にまゐりますことにも若干の意味と慰安とを見出すことが出來ると思ひます。

尙この點に連關して痛切に感ずることは、地方の教育者諸君、殊に教育界の幹部といふやうな人々が、案外に今日の學者思想家の本質的價値を理會して居ないといふことです。即ちこれらの人々が講習會とか講演會とかの講師を選定する際には、主とし

て世間の評判や、他人の好惡を標準として、決定するやうな傾向があるのは甚だ遺憾だといふことです。苟くも一年一回の夏期講習會といふやうな場合の講師を選定する時には、十分の準備をして、幹部の人達はいふまでもなく少くとも會員の大半が、講師の思想人格に對して理會と信愛とを持つといふのでなくては、到底十分の効果を收めることが出來ないと信じます。これと關係のあることでありますが、講習科目に就いての著書を持つてゐる講師を招く場合の如きは、その著書について講習開會前に少くとも一通りの研究をして置くことは、當然の順序だと思ひます。この點から見ますと、本年參つた内で、兵庫縣神崎郡の講習會の如きは、略々私の理想に近いものであります。先づ第一に、會の幹部が會員を精選する爲と、一つは會員の態度を自律的ならしむる爲に、郡教育會の主催でありながら、わざ／＼高い會費を徴して志願者を募つたとか、又は熱心な一部の會員諸君が開會前に一週間以上も休暇中態々學校に集つて、拙著の講讀研究をしたとか、講習期間中宿舍を訪れて半日の間質疑應答を試みた

とかいふのはその一例であります。大體に於て非常に熱心で眞剣でありました。随つて私も文字通に燒蕘の五日間を最も愉快に過すことが出来ました。

私は常に講習の方針として、俗な言葉ではあるが「出来そこなひの御飯」といふことを考へてをります。それは硬いところもあり、柔いところもあり、程度の低い人にも高い人にも、夫々何等か貢献したいといふ方針で話をしてをるといふことであります。講習は文章と違つて、兎角平俗に墮し勝ち勝ち即ち柔かになりがちなので、これを防ぐために質疑または自由討究を奨励してをりますが、いつも案外に私のこの要求に應じて呉れる人の少いのは遺憾なことであります。講習會も結局人格と人格との本質的接觸によつてのみ、眼睛を點ずることが出来るのですから、講師も會員も互に打開いた心で、單に學問上のことばかりでなく、人格生活の全野に亘つて十分に交渉すべきだと思ひます。これを抜きにしては、講習會の價値は略々半減されるではないでせうか？ 少くとも私はこの心持で會員諸君に對してをるのでありますが、この點から見て僅か

三四日の短期間ではありましたが、埼玉縣の秩父及び秋田市の講習は私にとつて眞に幸福なものでありました。

尙この點で思ひ起すのは、講習會の幹部が聰明であるか否かといふことが、會の効果に重大な關係があるといふことです。たとへば講師の應待なども、所謂老校長連だけで獨占しないで、一般會員諸君にも講師と接觸する機会を造るやうにする事が必要と思ひます。尤も一般會員諸君も遠慮なんかせず、講師と交渉するやうにして欲しいものです。またこれは私の場合ではないが、人の話によりますと、幹部の僅かな不注意から講師に非常な不満を興へることがあるやうです。例へば初めて遠い土地に行く講師の出迎へや案内をしなかつたり、會場に講師の草履が無かつたり、講堂や休憩時間に一ぶくの湯茶をも出さなかつたり、話が濟んだ時に手を洗ふ水を呉れなかつたり、或ひは宿屋の拂などで講師に人知れぬ氣を揉ましたりするやうなことがあるさうですが、これらは極く僅かな注意で防ぎ得ることですから、幹部諸君の反省を乞ひたいと

愿ひます。これはなにも講師として威張りたいとか、我儘をしたいとかいふ意味ではなくて、下らないことに氣をつかふことによつて、大切な任務を果し損ふことを恐れるからです。この點で、私がこの夏愛知縣知多郡の講演會（只半日の講演）で受けた郡視學をはじめ、校長及び男女教員諸君の至れりつくせりの御厚意は、恐らく永久に忘れることが出来ませぬ。前にも申した通り、結局人格と人格との本質的交渉が人間生活の精髓だと思ひますから、單に講師の待遇といふことだけではなしに、講師と會員との交渉でも會員相互の接觸でも、凡て講習會や講演會の全體にもつと暖い深い人間味を加味して欲しいと思ひます。近頃は大部すたれたやうですが、紀念として講師に土地の名産を送るとか、又は會員一同寫眞をとるとか、會員一同茶話會をするとか、有志で近所の名所舊蹟をさぐるとか、土地の會員が外來の會員をもてなすとかいふやうなことは、會員や幹部に多大の經濟的及び時間的損失を與へない限りどこでもやつて欲しいと思ひます。そしてこれは何れも幹部の聰明に俟つことはいふまでもありません。

りませぬ。

それからこれはこの夏だけのことではありませんが、講演旅行をする度にいつも感ずることは、我が國現在の教育界はまだ／＼安心が出来ないといふことです。私共の講演に參る所は、比較的に官僚的でも因襲的でもない所だらうと思ひますが、それでさへも、教育者の思想や生活の上に因襲的な無自覺的な妥協的な要素を多分に見出すのです。ほんとうに眞剣に教育の研究や實行に従つて居る人が、案外に少いといふことを実感するのは無上の悲哀と寂寞です。自ら自覺的な又進歩的な教育者だと信じて居る人達は勿論、他からも而見られてゐるやうな人達でも、案外にその根が浅いやうな場合がないではありません。學問や思想に對しても、單に好奇心や新らしいもの好みやからするだけでは足りませぬ。もつと獨創的な態度で、底深く根強く歩みを進めるやうな人が、もつと／＼多く出ない内は、月並な講習會や、おは、やりのよい加減な夏期大學などが、表面上どれ程盛んでも、教育界の前途は容易に樂觀が出来ないと信じ

ます。この意味で、私は教育者諸君の自覺と振起とを要望して止みません。教育者の自覺がまだ足りないといふ例證は多分に握つてをりますが、「現代教育思潮批判」といふやうな拙速的、間に合せの、皮相的なものを歓迎し、且たつた一人の簡単な批判で満足してゐる如きは其の顯著な一例だと思ひます。

私は前に申した通り、九州、中國、中京、東京附近、東北と異つた各地方を一つづつ廻りましたが、世間のいふ程地方によつて文化の高低の差が甚だしくないことを喜びました。ことに人が「東北」と言つて輕蔑して居る秋田縣が案外に進歩してをるところを、私は東北人であるが故に餘計に嬉しいと思ひました。東京に近い秩父に眞面目な人達が多かつたことや、人の悪いことで定評のある名古屋附近の知多郡の人々が親切であつたことなども、思ひもつけぬ喜びでした。私も十年來かなり旅行はしました。朝鮮や臺灣や樺太は別として、まだ行かない所は北海道と山陰道だけとなりました。來春外國に立つまでには、是非この二地方にも行つて見たいと思つてをります。そし

て將來全國を廻り終つた後で、「文化觀的日本地理」といふやうなものを書いて見たいと思つてをります。今年はじめて行つた九州などについても所感がないでもありませんが、只の一度であり、且短期間でしたから、今一度行つた上で所感を述べることにしませう。その他この度の講演旅行の所感はまだ大部ありますが、その中で大體理窟つばくない部分は本書の「西國紀行」で語つてをりますから、茲ではこれだけに止めて置きます。

應問隨想

□「門松や」の狂歌

私はこの狂歌は、少くとも常識的には眞理を道破したものだと思ひます。併し、どちらかといへば「目出度もなし」といふ否定的悲觀的方面に、エンファシスを置いたところが氣に入ります。他人が門松は目出度いといつて喜んでゐるのに對して「冥途の旅の一里塚」だから目出度ないと皮肉つたところが狂歌の本領ではあるが、一面的なきらひがあります。殊に「冥途の旅」といふ佛教思想を土臺とするのが私には何となしにいやに思はれます。更に一步を進めて考へて見ますと、「冥途」に對する作者の態度が明瞭を缺くではないかと思はれます。門松が目出度もあり目出度もないならば、

冥途そのものもよいものであると同時に悪いものであるといふ矛盾に陥るからであります。併し、大まかに見ればこの歌はこの種のものとしては内容形式共に優れたものであることは疑ひありません。俗耳に入り易いのが何よりよいと思ひます。狂歌特有の滑稽味の中に人生の暗い一面が強く云ひ現されてゐるのがよいと思ひます。

□芝居好きの婦人と讀書好きの婦人

芝居好きの婦人と讀書好きの婦人とは、この頃まで殆ど反撥的な關係にありましたが、近頃はその間の距離が幾らか接近して來たやうです。併し、未だ其の間に截然たる區別があることは否み難い事實だと信じます。芝居好きの婦人は、大抵教育のない、舊い型に嵌つた職業を持たない婦人、たとへば藝妓、料理屋の女中、貴族富豪の夫人令嬢、實業家の細君、下町の娘、下層社會の婦人といふやうな婦人であるのに對して、讀書好きの婦人は、大抵教育の高い、新しがつた、そして責任ある職業を持つた

婦人であります。

尙芝居好きの婦人は男子よりもより多く舊劇を好むばかりか、芝居そのものよりも寧ろ役者に興味を持ち、その結果人格上に悪い影響を受けることが少くありません。この對立又は距離は、芝居の進歩と脚本の出版の増加とに連れて次第に減縮されつゝあります。乃ち、芝居好きの婦人で讀書好きの婦人が次第に多くなりつゝあります。そして今日讀書好きの婦人の見る芝居は大抵新劇なのはいふまでもありません。私は所謂芝居好きの婦人はさらひですが、併し、芝居一つも見ることがない、又は芝居を見たいと思はず、見てもわからないやうな所謂讀書好きの婦人も好みません。但し、今日の我が婦人界や國家や芝居やの状態から見ますと、本當の意味で讀書好きの婦人がもつと／＼殖えて欲しいと思つてをります。

□家庭の娛樂について

家庭の娛樂についての御たづねに對して適切な御答が出来ないことを遺憾に思ひます。私は一貫の書生のこととて、毎日朝は午前九時から夜は十二時乃至時一近くまで机に向ひつめて讀書と執筆とに従つてゐますし、小さな家族も、大人は皆私同様それぞれ終日勤勞生活をしてゐますので、私の家庭の中では、娛樂のために特別の時間を割くことは殆どない程です。それでも、家族全體がいつも笑顔であるのは、私にとつて何よりも幸福に存じます。只二男（數へ年八歳）の對手をしてトランプのページワシンをすることが時々あります。これは現在の事實でありますが、理想としては、少くとも子供が大きくなり家族が殖えたならば、特別に娛樂について心を用ひたいと思つてをります。そして理想的なものは、子供中心のもの又は召使本位のもので、家族全體が一緒に楽しむことが出来、且時間も費用も少なくて済むやうなものだと思ひます。この意味で、トランプ、蓄音機、ピンポン、線香花火（主として夏季）、其の他時間の餘裕ある時には談話會、音樂會、家庭劇、福引會等がよいと思ひます。

□私の好きな婦人の髪・顔・姿

一、髪は三十歳以上はくせのない束髪。日本趣味に長じ、大した労働をする必要もなく、相當の着物を着、相當の身じまひの出来る人ならば、餘り大きくない丸髷もよい。少女は桃割れ、中流以下の娘は銀杏返し。ずつと小さい子はおかつばさん。今日流行の女學生風の束髪はさらひ。島田も普通一般の娘には似合はない。

一、顔は面長、目は幾分大きくて而も圓くなく、瞳は勿論明眸如星。眉は幾分濃く肉感的でない程度に曲線を描き、鼻筋は通つてゐるが餘り高くなく、且小鼻怒らず。口はしまりよく小さく、おとがひは稍長く温かみがあり、頬は勿論豊かであるが所謂丸ぼちやでなく、色は白き程よきは言ふまでもない。要するに聰明と温情と健康とに加へて一味の肉感的の様なのが最も好ましい。

一、姿は丈幾分高く、肩がすらりとして腰は柳腰ではないが餘り太くなく、立ち姿

後姿がよく、坐つて品格があるばかりでなく樂に居ても品格が落ちないもの、椅子に坐つても美しい曲線を描き得るならば申し分がない。

□婦人が早く老けて見える理由

「婦人が老けて見える」といふことは何に比較してでありませうか。婦人其のものの年齢に比して老けて見えるといふことは、要するに男子に比してといふことではないでせうか。さうなれば私は婦人は決していつも年齢よりも老けて見えるものではないと思ひます。少くとも成年時代は必ずしも男子よりは老けては見えないと思ひます。只男子よりはやく大人になり、且はやく老人になることだけは事實と思ひますが、これは老けて見えるのではなくて事實老けてゐるのです。では老けて見える原因は何でせうか。子を持つてゐること、細い氣苦勞が多いこと、髪の結びぶり（殊に若い細君の丸髷）、着物の柄行、言語態度、年上の夫を持つてゐるとなどがその主なものと思ひます。

□見合

餘程すぐれた観察眼を持つた人でないかぎり、一度や二度の見合で相手の性行の真相を観破することは殆ど不可能と存じます。この意味に於て、普通の見合は有害無益だと思ひます。但し、萬止むを得ず見合によつて相手の性行を知る必要がある場合には、出来るだけ相手の性行が多方面に現はれるやうな工夫をすると共に、一見してわからないやうな本當の性情が現はれるやうな工夫をすることが必要だと思ひます。この點から見れば、一緒に芝居を見るとか食事を共にするとかいふやうなことは、第一の目的を達するためには有効であり、突然相手を驚かすやうな工夫をするとか、相手が驚いた時に其の動作に注意するとか、或は婦人が相手の男を知る時ならば酒をすゝめるとかいふやうなことは、第二の目的を達するために適當だと思ひます。随つて、見合の効果は主として媒介者のやり口に依ることゝ思ひます。

□心中について

私は「生」の讚美者であるが故に凡ての自殺を否定します。心中も亦自殺であるが故に否定します。只心中が眞に合意の二人心中である場合には、そこに二人者の人格の全的融合があるが故に道德的行爲としての一つの形式を具へるといふ意味に於て、或る點までは認されますが、併し、その動機及び結果を検査する時には必ず間然する部分を見出しますから、私は依然として心中を積極的に善なる行爲とする譯には行きません。具體的に申しますと、心中の目的は大抵戀愛生活の完成にあります。而も心中に依る戀愛生活の完成は消極的なものであるばかりか、更に心中するに至る原因は大抵不道德である點から見ても、或は其の結果が心中者の人格と生活とから創造的要素を剝奪する點から見ても、心中は斷じて形實完具の善ではありません。で、私はいつも心中者を氣の毒と思つてゐます。勿論、時としては心中を「美」として讚美し

たり、「幸福」として羨望したりするやうなこともないではありませんが、そんな場合には、必ず私の人格が單に一面的に——感情を中心として活動してゐる時です。心中を没批判的に美と見る人は低級な美觀に囚はれた人であり、心中を没批判的に幸福と觀ずる人は皮相な幸福觀に墮した人であると信じます。少くとも私は善も美も幸福も皆勇敢に誠實に聰明に生きて行く、人のみ創造し得るものだと思ひます。

□野口榮子自殺事件

理想的見地から見ますと、榮子も其の他の人々も凡て立派な處置又は態度を取つたとはいはれません。第一に榮子の自殺の動機は不純でした。本當に愛を生命とするならば、何よりも夫の幸福をはからなくてはなりません。自暴自棄や、面當やとする自殺に對しては、遺憾ながら、同情の意は表しますが、敬意を表することは出来ません。榮子の夫といふ人に對しては、我が愛妻を愛の力で生かすことが出来なかつたことを

はがゆく思ひます。對決などをやらうとしないで、虔しく妻の死をかなしみ悼んで呉れた方が私には一層うれしく思ひます。尾越氏に對しては只々反感あるのみです。最も非難に價する^{べき}のは、母堂だと思ひます。私は名士の未亡人といふものゝ意氣地なさを今更の如くしみゝ感じます。

□原少佐夫人の自殺

私は何よりも先づその無知と短慮とを氣の毒に思ひます。そして何よりも深く夫に對する愛の弱さを憎みます。千代子氏は畢竟するに自覺のない婦人でした。それだけ世にも憐れな人でした。死する必要のない時に死に、死すべからざる時に死んだ人です。自己の自殺によつて夫君の罪の幾分でも償ふとは何といふ淺墓な考でせう。夫君はまだ裁判中ではありませんか。よしんば罪人であることが決定したとしても、自殺は最良の方途では斷じてありません。小さな恥辱や苦痛を忍んで生き長らへ、世にも私

の毒な犠牲者たる夫君の獄中の苦痛を慰め、出獄後夫君を新生活に進ましめるために最善の努力をいたすことは、彼女の選ぶべき最善の方途です。私は彼女よりも、寧ろ最愛の妻にすゝ理會されなかつた原少佐を不幸の人と思ひます。ただし、少佐が千代子を愛してゐなかつたなら、彼女の死に同情せずにはゐられません。

因に、いつものことであるが、夫や妻の死を第三者が妻や夫に秘してゐいたり、偽つて告げたりする事を人道上の大罪として憎みます。

□我が理想の變遷

十四五歳頃は、検定試験を受けて師範學校卒業生と同等の力のある小學教師になりたいと思つてゐました。二十歳で上京した時には、文部省の検定試験を受けて師範學校の教員にならうと思つてゐました。早稻田の文科を卒業する頃は、評論家と學者とを兼ねたいと思つてゐました。最近では、本當の意味での學者と文章家と教育家とを

併せ兼ねたいと思つてをります。この點で、私は現在の文章家著述家だけの生活には満足してをりません。將來思ふ通りの修養が積みましたら、一方では教育者として、現今の全教育課程を網羅した學校を經營し、一方では哲學と教育學とを併せ研究し、更に、他の一方では自分中心の思想學術雜誌を經營して見たいと思つてをります。この志望を達成するために、私は、近い中に、生活に革新を加へます。

□私の辯論上の苦心

私は一體非常に小心な人間で、少年時代には人の前で話さへ出来なかつた程ですから、辯論の練習に苦心するよりも、先づ辯論をすること其のことに苦心いたしました。併し、一旦やり出すとだん／＼度胸もすはつて來て、演壇に立つこと其のことは何でもなくなりました。その代り、こんどは辯論について苦心するやうになりました。そして何よりも氣になつたのは私が生來の早口なことです。これは今以て直らず困つて

をります。それから聲が甲高く且聲量が少いのに、話が兎角長くなり勝ちなので、二つの間の矛盾を超越するのにも一通の苦心はいたしました。今以て直りません。それから、冒頭の語句を選択することにも注意いたしました。東北人であるがために、發音や方言の矯正に苦心したことも少くありません。少年時代には「やつぱり」といふ言葉が多く、少しまごつくとすぐ「やつぱり」が出て來るので苦しんだこともあります。それから、生來あせかきなので出來るだけ水を飲まないやうな用心もいたします。辯論に氣品があるやうには今でも苦心してゐるところです。——最後に目下が辯論練習の最中であることを附記いたします。

□三従の徳

嚴密な見地から見れば「三従の徳」は今日では「徳」に價しなと思ひます。只「従」といふことを「盲目的服従」といふ意味ではなく「自覺的服従」と解する時には、「三

従の徳」は依然として今日尙婦徳たる價があると思ひます。たとへば、未だ嫁せざる時には大體父（母）の正しき忠告や指導に従ひ、既に嫁した場合に於ては大體夫の正しき思想や感情に調和し、夫死したる後、子が相當な人物であれば大體其れと相談して正しい道を履むやうにするといふが如きであります。併し、何をいつてもこれは「服従」を女の道とするかぎり舊道徳でありますから、一日もはやくこれが不要になることを望みます。併し、これがためには、何よりも事實これを要しないだけの「實力」が婦人にそなはつてゐなくてはなりません。

□我が子の嫁

おたづねに對してお答する前に私は次のことを申しあげねばなりません。——自分の嗣子の嫁といふことにともすれば「自分の嫁」と見る舊い囚はれた嫁觀が含まれがちだといふことと、この御尋ねに對して十分なお答へをするには少くとも嗣子が相當

に成長してゐるか何うか少くとも嗣子の心身が或る程度まで明かにされてゐなければならぬといふことと、更に私は大抵な場合は自分の子供（嗣子のみならず）の嫁は子供に自由に選擇させる考へであるし、且自分の嗣子はまだ小さいために、たとひ強ひて欲しい嫁を考へても適切な考へが思ひ浮ばないといふこととであります。が折角の御尋ねですから、自分の嗣子の性質を基本としてお答へいたします。或は結局私自身に欲しいお嫁さんとなるかもしれません。

イ、精神——聰明と溫和と堅實とがたくみに調和してゐること。俗にいへば、利口でおとなしくてしつかりした人。働きがあつて趣味人情を解するもの。

ロ、肉體——健康で中肉中脊、かあいらしくて品のある顔立。

ハ、教育——女學校出身の上に何等か専門の高等教育あるもの。

ニ、年齢——二十歳以上二十五歳以下。必ず初婚のこと。

ホ、身分——中流以下の良家庭（料理屋、實業家、軍人、藝人以外の）の長女でな

いもの。

へ、特技——料理裁縫が人にすぐれ、且何時でも自活が出来ただけの「うで」あるもの。

ト、根本要件——夫を心から眞の意味で愛するもの。

□ 適当な婚期と男女年齢の差

最も適当な婚期は男女共、満二十五歳より満三十歳迄の間と思ひます。但しこれは結婚を第一義的に解釋した場合、即ち、結婚の意義と價値とを十分に理解し、眞剣な態度と誠實な心掛けとで結婚する人達の結婚の場合であります。男女年齢の差は三四歳を適當と信じます。結婚を嚴肅に考へる限り、五歳以上の差は斷じていけません。勿論男が年上です。右の二點及び我が國の風俗習慣又は徴兵制度、教育制度を參酌してから結論を下して見ますと、普通の人は男二十五六歳、女二十二三歳、高等教育を

受ける人は、男二十八九歳、女二十四五歳が最も適當だと思ひます。

□性教育について

(一)可。性慾に關する無知は、性的生活の健全な發達を阻害し、隨つて個人家族及び社會國家に害毒を與へることが多いからであります。

(二)抽象的に申しますと、教育者と兩親又は學校と家庭とが聯絡し、子供の要求や疑問が起つた時、又は適當な機會のある時を逃さず、極すらりと而も嚴肅に且周匝な用意で教へることが必要です。具體的に申せば、家庭で子供の生れた場合、結婚式のある場合、妊娠した場合、女兒に月經が始つた場合等に於ては勿論、子女が手淫の惡癖ある場合、或は子女の心身に性的激變の起つた場合、さては子女が犬の交尾や飼禽の交尾の状態を見て、興味や疑問を抱いてゐる場合、學校では理科や修身などの教科に於て、子女の心身の發達程度に適した方法で教へることが必要です。家庭で最も注

意警戒すべきことは、下女や下男などが卑猥な言語動作で子女に性慾の話などとしないうやうにさせることです。

□さし當つて改めたきこと

- 一、新年に伴ふ虚禮廢止。
- 二、往訪の時間に關する弊害。
- 三、慶弔に對する返禮（殊に香奠返し）を廢すること。
- 四、電車、汽車、電話、郵便等の缺陷。
- 五、現内閣の思想政策の改造。
- 六、文部省に思想文藝の信念ある吏員を多數入れること。
- 七、中等學校以下の入學試験の改造。
- 八、興行物の時間を午後十時までに制限すること。

九、子供用の雑誌の發刊は前月の二十五日以後にすること。

十、新時代に適當した女子教育策を講ずること。

□女學校教育當事者に對する希望

一、女子教育—高等女學校教育の意義價值目的を正確に理解すると共に、其の意義價值を十分に實現し、其の目的を完全に達成するために最善の努力を致して欲しい。

二、女學校教育當事者は其れと同等の男子の學校の教育當事者より本質的に低劣であるといふ愚劣な見解を打破し確乎たる自信と高大な矜持とを以て其の職務に鞅掌されんことを望みます。

三、文化の過渡時代たる今日に於て、人生の過渡時代たる高等女學校生徒に對して眞に有效な教育を行ふことが出来るためには、何よりも卓拔な識見が必要です。時代を理解すると共に時代を超越する識見と、女生徒を理解すると共に女生徒の先導者たることを得る識見とを涵養し、且活用されんことを希望します。

四、私立女學校の當事者は目的と手段とを轉倒しないやうな操持を持つて欲しいものです。女學校經營をお金まうけの手段にしないやうに用心して欲しいものです。

五、男教師は勿論、女教師も生徒と醜い性的關係を結ばないことを望みます。

六、形式よりも實質、現前の效果よりも永久の效果、知識技能の教育よりも人格の陶冶を主眼として教育して下さい。

七、生徒を馬鹿にするな、生徒に媚びるな、生徒を利用するな。——生徒を眞に愛せよ。

□尼港虐殺事件

死は如何なる死も悲しい。わけて異國の土と化する死は悲しい。況んや、異境に於ける虐殺をや。尼港に於て七百の我が同胞が故なく虐殺の悲運に遭つたことを耳にし

て、誰か一掬の泪なきを得ようや。運命?! 勿論運命は運命であるが、運命といつてあきらめるにはあまりに悲惨である。殊に虐殺された七百の我が同胞は、とに角にも何等か異つた生活を營まんがために祖國を離れて、寒氣と戦ひ、幾多の難關を突破し、幾多の不幸を蒙つた人達であり、随つて幸福な最期を遂ぐべき人達であることに想到すると、私の悲しみは極まるところを知らない。併し、私共は只徒に悲しみに沈湎してはゐられない。私共は虐殺者に對して適當な制裁を加へると共に、人道的精神を鼓吹して、ひとり我が國民ばかりでなく、世界の如何なる國民も再び斯くの如き悲惨な目に遭はないやうにしなくてはならない。終に、遭難者の家族や縁者に對して心から哀悼の意を表する。

第二編

群馬紀行

—

四月十六日午後二時二十分上野發の小山長野行は、花見時分のためかかなり混んでゐたばかりか、乗客の心も上つてゐて車内は何となく騒がしかつた。花に心なく而もこの線に乗り馴染んだ私は發車すると直ちに携帯した書籍を開いて読みはじめた。それでも流石に雑沓の烈しい王子驛では、顔を車窓の外に突き出して花に浮かれ人に酔ふ男女の様々な姿を眺めたり、左側に隣つて座を占めた二十左右の娘と七つばかりの男の子との無邪氣な會話に引き入れられて、暫らくは手にする書籍を裏返しに膝の上に置いたりした。

大宮から高崎までの停車場は何時通つても感じのよいところばかりである。其の清潔な點に於て又其の雅致に富む點に於て。殊にこの日は、この沿線一たいに櫻が咲いてゐたために一層趣深く思はれた。熊谷堤の櫻は既に盛りが過ぎてはゐるが、流石に名所と呼ばれるだけの値打はある。少々頭の疲れた私はぼんやり櫻に見惚れてゐると、一人の女—料理屋の女中らしい、身なりも容貌も卑しげな女が乗り込んで來て私の向側に座つた。やがて汽車が動き出して暫らくすると、件の女は左の袂に手を入れて正宗の二合壺を取り出し、すばやく栓を抜いて口に當て、ラッパ呑みに一口仰つて乗客をジロリと見渡した大膽さ圖々しさには、只々喫驚する他には術がなく、乗客は何れも云ひ合したやうに目を見交した。而も女は平氣な顔で、數度只さへ天を仰ぎつのある鼻の穴を上に向け、やがて少しばかり残つてゐる壺の酒を一寸瞥見したかと思ふと又これも口に當て、一滴も残さずに飲み盡し、壺を勢よく窓の外に抛り投げ、小さな懷中鏡を出してまづい顔をうつし、穢い襟をかき合せたかと思ふと立ち上つて、

折から停車した深谷驛のプラットフォームに勢よく下車した。乗客は復び微笑を帯んだ目を交して、この女に對する複雑な感想を無言で語り合つた。併し、私の心は到底笑ふことが出来なかつた。吁淪落の女！吁厚顔無恥な女！人を人とも思はぬ彼女も、少くとも一度は他人の一瞥に遭ふや倏ち顔に紅葉を散らすやうな純真無垢な時期があつたであらうと思ふと、彼女に對する私の憎惡と侮蔑とは憐愍と同情とに變ぜざるを得なかつた。

一度かき亂された頭は容易く静まらなかつた。私はふと話しかけられた隣席の五十左右の女の人にうけ答へした。聞けばこの婦人は豊橋の人で其のつれ合と一緒にお札打をしてゐる人であつた。關西をすまし、秩父をすまして、これから坂東三十三ヶ所をたづね廻るとのことであつた。話し好きなこの婦人の旅行話が盡きない中に、汽車が目的の高崎驛に着いたので、恐らくは永久再び相見ることのないであらうこの老婦人の幸福を心に祈り、顔馴染の幼児と別れの言葉を交して車を下り、人車で豫定の宿屋

に向つた。

二

翌日は早朝志村會長と宿を辭し、電車で講演地の金古町に向つた。十數日前伊香保電車に大椿事のあつた後とて、乗客は誰からともなくこの椿事について話し合つた。殊に途中車に故障が起つてからは益々話が賑つた。やがて間もなく金古町に着き、同町小學校に於て約四時間の講演を試みた。病後日尙淺く、體溫計を持參して來た程とて少からず健康を案じてゐたが、さ程疲労が甚だしくなかつたのは幸福であつた。併し、迎ひに來べき筈の第三區會役員が見えなかつたので、志村氏と相談の結果兎に角會場所在地たる澁川町に向ふこととして停留場に行くと、其處に折よく第三區會の役員が見えられた。而も其の人は舊知石井睦雄君であつたのは私にとつて思ひまうけぬ幸福であつた。やがて電車が來たので乗らうとしたが、満員のために一電車待たされ

た。

電車の混雑は疲れた心身を一層疲労させたが、やがて車が幾分空いた頃に赤城山や榛名山が見えた時には、一杯の清涼劑を掬した様に爽快を感じた。殊に赤城の山線——裾野の線の雄大は、恐らくは生涯忘れ難い程の強い深いそして快い印象を私に與へた。間もなく電車が澁川驛に着いたので下車し、志村・石井の二氏と伊香保行の發車を待つてゐたが中々出さうな模様もないので、石井君が驛員にたづねると、出るか出ないかわからないとの曖昧なそして冷淡な返辭であつた。念のために茶店の女に聞くと間もなく出るとのことであつた。大椿事後であるからといへばそれまでであるが、それにしても餘りに不親切な餘りに無責任な驛員の心事態度に對して、私——私達は憤慨せずには居られなかつた。茶店で休憩中第三區會長田部井氏が見えられた。間もなく伊香保行が發車することになつたので、私たち三人は車上の人となり、田部井氏の見送りを受けることゝなつた。

三

車が動き出すと乗客の話は期せずして大椿事のこと限定された。聞くからに悲惨な話は、さなきだに感傷的になつてゐる私の心を痛めた。殊に、死の刹那に際して我が子を助けようとした婦人の話の如きは、涙なくして聞くことが出来なかつた。歩むが如くに遅い車の進行は今をさかりの桃櫻の花を見るにはふさはしかつたが「死」について密に物思ふ私の心は花の美を稱するほどのゆとりを持たなかつた。やがて車は大椿事のあつた場所に近づいた。焼残りの木材が僅かばかり散在してゐた他には慘絶悲絶の當時を追憶するに足る何ものもなかつたのが、却つて私に寂しさ悲しさを感じさせた。やがて山風が襟に寒き黄昏時、私たちは伊香保温泉の一旅宿の三階に身をくつろげた。

私は性來湯が好きであるが、體溫を案じて直ぐには入浴せず、先づ體溫を計つて見

た。幸にして七度二分しかなかつたので安心して疲れたからだを湯にひたした。湯に温つてゐたが、温度が低く感じが柔いのは私にとつて好もしかつた。湯から上つて後三人樂座して膳に向ひ、肩の凝らぬ話をしながら春の夜の湯の宿の情趣を心行くばかり味はふことが出来たのは、私にとつて極めて大きな幸福であつた。食後、志村、石井の二氏が黒白を闘はしてゐるのを見てゐたが、疲れと酔とのために睡魔の誘惑が強く、とても我慢が出来なかつたので、湯を浴びて一人床に就いた。

翌日も幸に天氣であつた。高い三層樓から見渡すと、數多い温泉宿から立ち登る湯氣が、清冽な山の雰圍氣に濕ひを與へて申分のない湯の宿の情調を形造つてゐた。空際ははやかな山々の輪廓もすが／＼しい感じを與へた。湯を浴び、朝食を認めてから、志村石井の二君は歸路に就かれることになつたので、私も連れ立つて宿を出て郵便局に電報を托し、其處で二氏と別れ、一人そちこちを逍遙して宿に歸り四五枚の繪葉書に消息を認めて又湯に入つてから床に横たはり、のび／＼した身で暫らくは書

見に耽つてゐた。

伊達保はよい所である。併し、何れかといへば平凡なところである。殊に水——川のないのは最も大きな缺點である。何處の繪葉書屋にも『不如歸』の繪葉書があるのが特に目についた。

四

安らかな湯の宿の一夜が明け離れない中に、私は床を出て湯を沿ひ着物を着代へてから雨戸を開けると、丁度朝日が東の山の端を離れる所であつた。爽やかな早朝の山氣、一點の雲なき碧空、静寂な人家、私の心は私の生命はいはうやうなき爽快さと鮮活さと力強さを感じた。私は、何時までもこゝに過したいとさへ思つた。併しそれも東の間、私は惶惶として朝食を認め、番頭に送られて停車場に着き、午前六時十分發の一番で澁川町に向つた。

伊保から澁川町までは下り坂になつてゐるために、電車は案外に早く澁川町に着き、出迎の人に案内されて澁川校に到り、暫らく休憩の後、午前九時半から午後一時まで講演を試み、終るや否や人車で停車場に急ぎ、石井君の見送りを受けて高崎行の車上の人となつた。

石巻紀行

仙臺市部から衆議院議員の立候補をした一友人の應援演説をするために、私は一週間の間に二度仙臺市の人となつた。應援演説——政談演説は私にとつて心持のよいものではなかつた。兎角は場當りになつたり、兎角は妥協的になつたり、兎角は同じことの反復をやつたりするやうになる政談演説は、少くとも講演を執筆同様創造と思つてゐる私にとつて、甚だしく心苦しいことであつた。第二回の仙臺行の際は、幸にして幾分この苦悶から免れることが出来た。それは最近石巻町に、町内の心ある青年諸君によつて創立された「文化協會」の發會式に臨んで思想上の講演をすることが出

来たからである。

二

五月二日の午前五時半には、私は既に床を離れてゐた。前夜二時近くに眠についた私の心身は幾分の疲労を覚えてゐた。それでも冷たい水で顔を洗ひ、着物を着代へ茶をすすり、鉢久本店を後にして車上の人となり、朝の空気を腹一ぱい吸つた時には、いはうやうのない爽快を感じた。停車場には前日から迎へに来てゐられた米倉、泉の兩君が待つてゐた。私と米倉君とが汽車に乗り込んだ頃にはポツリ／＼と小雨が降り出してゐた。二君は辨當を求めたが茶も牛乳もないので果物を求められた。汽車は定刻が過ぎても容易に發車しなかつた。私の心は、辨當を賣つて茶を賣らない販賣人の不統一と、事情で發車時間が遅くなつても、乗客に對して謝辭は勿論一言の斷りさへいはない鐵道従業員の不親切否いはせるやうにしない鐵道院の不親切不聰明に對して些

か不満を感じてゐた。やがてこの不満も發車と共に汽車の煙の如く消えて仕舞つた。沿道は幾度も通つたことがあるので大して珍らしくはなかつたが、只梨の花盛りは一才私の目を惹いた。米倉君は辨當を認めながらこの近邊の生活状態の地理や歴史をいろいろと語つて聞かした。辨當が濟むと、ナイフがないので一つの林檎を二つに割つて二人とも皮を剥かず食べた。私には斷えて久しい經驗である。小牛田で仙北輕鐵に乗り換へ、揺られに揺られて豫定の時間に石巻驛に下車した。私は人車で旅館に送られた。北上川に面した旅館の二階に座を占めた時に旅らしい幸福を感じた。挨拶に出た文化協會の役員諸君の熱心も私には快いものの一つであつた。お茶うけに出た名物の最中もうまかつた。

講演の打合せが済むと、私は米倉君の案内で土地の名所の日和山見物に出かけた。櫻は盛りを過ぎてあつたがそれでも未だ眺めるに勝へるだけの美しさがあつた。北上川の河口の狭いのは物足りなかつたが、太平洋の眺めは流石に壯快であつた。北上川を狹

んで東西の兩岸に町を造つた石巻町は感じのよい町であつた。私は一昨年の夏岩手縣からの歸路、車ごと舟で渡つた北上川の朝景色を想ひ起していひ知らぬ嬉しさを感じた。併し時間に制限のある私達は、この美景を飽くまで觀賞してゐることが出来なかつたので、よい加減にして宿に歸ることにした。——晝食のおかずの筈は甘かつた。

三

講演會は午後一時から川岸の芝居小屋で開かれた。私は「國民思想の現在及び將來」といふ題で二時間の講演を試みることとなつた。只困つたのは、開會の時刻が遅れたので、二時半發の汽車で歸仙する豫定が狂つたことである。何故なれば、夜は仙臺市で六時から二回應援演説をすることになつてゐたからである。役員諸君が種々熟議の末自動車で松島に行きそこから五時三分發の仙臺行に乗るやうになつた。ところが、生憎自動車が石巻になくて松島から歸つて來るのを待たなければならぬのが又心配の

種となつた。そこでまた相談の結果、自動車が歸つて來なければ人車で行くこと、人車でならば講演は三時で切り上げ自動車でならば四時まででやること、そして講演中に「人車」「自動車」と書いて知らせることとなつた。私は幾分の不安を感じながら演壇に立つた。併し、一旦登壇して聽衆の案外に多いのを見、且この會が意義の深いものであることに想ひ及ぶと、私の心の不安は何時の間にか雲散霧消して只講演にのみ熱中した。やがて講壇の上に一枚の名詞が置かれた。吉か凶か？見ればペンがきではあるがインキの色も鮮かに「自動車」と記されてあつたので、私の心は一段の平安と勇氣とを感じ、講演に一層身が這入るやうになつた。——略言はんと欲することを述べ終つて、私は四時十分前に壇を下りた。併し、不幸にして自動車は未だ到着してゐなかつた。止むなく私は一先づ宿に歸ることとして會場を出た。其の時待ちに待つた自動車が來たので急いで飛び乗つた。十名の幹事諸君も我がちに同乗した。それガソリン！それ何！と一しきり喧しかつたが、やがて車は爆聲勇ましく發車した。時に四時

過ぐることに五分、道は平坦な上に運転手が熟練してゐたので、車は飛ぶが如くに速かつた。車中では、血氣に燃える若い人達が、今日の發會式のことを話題としてしきりにメロトルを擧げた。私は心ひそかにこの若人達を頼もしく思ふと共に、文化協會の隆昌を祈つた。やがて二つの坂道を無事に越したが、時間は僅かに十三分を餘すのみとなつた。遅れたらどうする!?」皆の心は期せずしてこの一事に集注した。「運転手は只置かない!」この儘仙臺まで飛ばさう!」構内に飛び込んで汽罐車の前に横付にする!」いろ／＼と叫び合つてゐる中に、第三のそして最後の坂道も瞬く間に乗り越して松島驛の踏切に近づいた。と、列車接近のシグナルが下つた。皆は一聲に「大丈夫!」と歡呼した。それも東の間、自動車が大らかなカーヴを畫いて停車場前にピタと停車した。一同飛び下りるが如くに下車して時間を見ると正に五時! 若々しい歡呼の聲が再び擧げられた。「最後の三分間! これが文化協會の造つた新らしいレコードだ!」と唯かが叫ぶと一同快く笑聲を和した。七里の道を五十五分で突破したのはた

しかに僥倖であつた。私は心から文明の利器と運転手の巧妙な技能とに感謝した。

やがて汽車が來た。私は車上の人となつた。小雨がハラハラと落ちて來た。汽笛が鳴つた。私は別れの言葉を述べるとはじめて安心と疲勞とを感じた。

四國紀行

一

七月二十九日午後九時東京發下關急行に乗つた私の心はかなり緊張してゐた。はじめ瀨戸内海を通過しはじめて土佐の地に向ふためである。尤も、數日前東京名古屋間を往復したばかりの身にとつては、汽車旅行其のものには大した興味を持つてゐないのみか、寧ろ幾分の苦痛をさへ感じてゐた。殊に、この夜は思ひ切つて汽車が混んだので、暑苦しさや狭苦しさやを忍ぶだけでも並大抵ではなかつた。それでも拂曉に見た濱名湖の眺めは流石によかつた。何時も少からず懐かしさを感じさせる京阪も、悪疫流行の土地と思ふためか殆ど何等の感興をも惹き起さなかつた。斯うして私

は、十四日の正午過ぎ文字通に無事三ノ宮驛に到着した。

人車上から見た三ノ宮驛から波止場までの神戸市は、只暑苦しさや悪疫流行に對する恐ろしさとの感じを與へるだけで、嘗てこの市に對して懷いた不快を排除する上には聊かの効果もなかつた。殊に、商船會社のコレラ豫防ビラや昇汞水などは私の心を一層暗くした。——船に乗るまでの二時間は苦しくも亦長い二時間であつた。併し、船に乗ると私の心は頓に元氣を恢復した。船旅は私にとつては初めての經驗だからである。

二

瀨戸内海は實に静かであつた。殆ど小搖ぎだになしといつてもよい程穩かであつた。これは船に經驗のない隨つてひそかに船を恐れてゐた私にとつては、心から感謝すべき幸福であつた。私はしみじみこの旅を意義深いものと思つた。殊にこの夜は

舊曆の十五夜であつたので、其の美景は實に言語に絶する程であつた。私は午前二時までデッキの上に座つてこの不思議なそして美しい光景に心行くばかりひたつてゐた。中天に懸れる満月、鏡の如き海原、滑るが如き船航、螢火とも思はれる對岸の灯火——涙ぐましいまでに感激した私の心に映じたこれらの光景は、必ずや永しへに私の記憶の鏡に止るであらう。斯うして私は、翌日も食事の時以外は殆どデッキの上で海を眺め、殊に夜分には午前三時頃まで藤椅子の上に寝込んでしまつた。

港——船つき場は何處も私には特殊の光景——驚異に價する光景であつた。船が港に近づくと毎に吹き鳴らすポーといふ汽笛の響、客と荷を送り迎へる端舟、岸に集ふ物賣の呼聲、何れか思出の種でないものがあらう。殊に愛媛縣高濱の朝景色及び八幡濱の夕景色は鮮かな印象を止めた。

船は平和な二晝夜の航海を終つて、八月一日早朝高知縣の宿毛についた。初航海であるにも係らず、日中は終日書物を読み續けることが出来たことに依つても、如何に

海が穏かであつたかが推測し得られるであらう。只遺憾なことは、宇和島からかなりに激しい下痢をしたこと、愛媛縣下にコレラが多いために飲食物に極度の制限をしなければならなかつたこと、到るところで檢疫がやかましかつたこと、であつた。殊にコレラの最も猖獗な宇和島で下痢をした時には、流石に驚駭と憂慮とを感ぜずにはゐられなかつた。

三

二晝夜乗り馴染んだ商船會社の船に別れて宿毛に上陸すると、私の講習に出る二三人々と遭遇したので幾分元氣は恢復したが、身體の疲勞は勿論恢復する術もなかつた。船——吉田川丸が宿毛を出る時から既に雲行が怪しく、小雨さへ降つてゐた天候は、時間がたつに従つて益々險惡となり、やがて風浪はげしく、横臥してゐるとコロコロと轉げるばかりになつた。同室の下川口の醫師某氏が、船を下川口に着け得ない

ために三崎まで行くことになつたのは氣の毒であつた。併し、ひと事は遂に我が事であつた。三崎には十中八九まで着けるであらうといふので心を取り直し、着船の汽笛を會圖に仕度を整へて下に下りたが、不幸にして茲も浪が高く、端舟は只一艘しか出せないとのことで、私がこの航海の目的地なる三崎は指呼の間に見えながら遂に上陸することが出来なかつた。揉みに揉まれて船室に歸る時私は遂に吐いて仕舞つた。併し、腹中一物もないために、只仁丹が出ただけであつた。―後から聞けば、この日の風浪は船航の出来る最大限のもののものであつた。やがて船が清水に着くと、私は三四の人と一緒に數時間でも生命を託した吉田川丸と別れ、三日振りで大地を踏むことが出来た。

清水は一見して船着場と別る程あやしげな家が多く、それだけ感じの悪いところであつた。私共一行四人が腰を下した或る宿屋では食事を出すことが出来ないといはれた。止むなく他の人々は他所で食事をすることとして、私一人だけ兎に角休息さして

貰ふことゝなつた。やがて食膳が出た。併し、空腹でありながら一向食慾がなく、とら／＼箸さへも執らずに下げさせて了つた。私の疲勞が幾分恢復した頃、闡明會員の一人たる西山順一君が出迎に來て呉れた。やがて三崎から迎への人力車も來たので其れに乗つて三崎に行くことにした。其の時は既に薄暮頃であつた。

清水から三崎迄三里の海添道は、恐らく眺めるに足る風光を持つてゐたであらうが、遺憾ながら日が暮れたために只倦怠と疲勞とを感じさすに過ぎなかつた。やがて三崎の村外れに近づいた頃、上田超風其の他の諸君が出迎として見えられた。恰も其の時急に烈しい夕立があつたのは、必ずしも偶然とばかり見ることが出来ないやうに感じられた。

其の夜は宿につくと直ちに闡明會員諸君が私のために歓迎宴會を開いて呉れた。其の厚意は勿論感謝に價するが、三晝夜車に揉まれ船に揺られ疲勞の極に達した身にとつては、寧ろ一刻も速に休息することが最も喜ばしいことであつた。私はしみじみ旅

のつらさを思はずにはゐられなかつた。

四

八月二日より六日まで五日間、私は三崎小學校で毎日四時間づつ「創造本位の教育觀」の題目の下に講習員諸氏のために自分の教育に關する理解と信念と要求とを披瀝した。尙第三日目には同村青年會のため、第四日目は婦人會のため、何れも午後に一場の講演をした。五日間の講習會、そこには何等特殊な意義はなかつた。私が海山數百里のこの地に對して求めたものは青年教育者の眞の自覺であつた。併し、私は果してこの希望を充たし得たであらうか。私は南國人の血を見た。私は南國人の元氣も見た。私は南國人の親切も見た。併し、私とこの人達との思想乃至生活の間にはかなり距離があつた。そしてそれは單に時間的相違だけのものではなくて、本質的なものであるところに、私の悲哀と失望とがあつた。私は、この人だちに少からざる敬愛

を感じながら、而も尙教育改造の日のかなり遠いことを思はずには居られなかつた。——私は楽しくして苦しい毎日を過してゐた。

三崎は偏僻の片田舎ではあるが、龍串の奇勝あるがために一部に知られてゐる。私は四日目には大勢の會員諸氏と共にこの奇勝を見物することが出来た。奇勝はたしかに奇勝である。併し、奇は多くの場合大と合致しない。少くとも龍串は奇勝以外の何もでもない。否、私は寧ろ其の四十八景の煩はしさに堪へない。さうだ、餘りに小規模であり餘りに人爲的なのが龍串の缺點である。殊に案内者を連れて行つたので、殆ど觀照の餘裕がなく徒に囚れた説明の傾聴に止つたために一層美觀を損じた。只最後に見た櫻の濱は一寸推稱するに足る光景であつた。我が子のために、多勢の人々が櫻貝や其の他色々の美しい貝類を拾つて下すつた厚意を、私は心から感謝せずにはゐられなかつた。見物が終つてから、鞍掛の松のほとりの岩の上を座敷として開かれた宴會は、野趣横溢到底他所では見ることの出来ない獨得の光景であつた。

私の接した三崎地方の人々は、大抵酒を呑む人々であり、そして中々酒に強い人々であつた。併し、酒はどちらかといへばよくない方であつた。土地の人々が量を多く飲むのも當然であつた。そして飲めば大抵この地方特有の箸拳をするのであつた。箸拳はたしかに面白い。併し、私の趣味には合致しない。第一に箸といふ道具―仲介物を用ゐるところに「けん」として不自然なところがある。第二に一回毎に數で勝敗を決するものもこの種單純急速を旨とする遊戯の本旨に合はない。只箸をかくして出す手の形はたしかに面白い。……

三崎滞在中、私に最も深い印象を與へたものは、龍串に遊んだ日の夜もそく三四人の青年たちと一緒に過した海邊の一時間であつた。――この夜は、月こそ出なかつたが殆ど秋の夜とも思はれる程に明るくそして清く澄んだ星月夜であつた。私共は濱邊の石ころの上に仰臥し、天の川が美しく流れる大空を眺めながら、靜かに身の上話などをした。はるかかの沖合には電光かそれとも軍艦のサーチライトか時々かすかにピカピ

カと光つた。襟にしむつめたい夜風に私の心は一層沈んで、いふにいはれぬ哀愁を覚え、目には涙をすら宿すのであつた。ああ、ゆくりなくも來合せたこの土地とこの人々と、果して私は何時再會が出来るであらう。思へば奇しくも果敢ない人生である。

三崎の五日間は東京新聞一枚讀むことの出来ない程不自由なそして寂しい五日間であつた。私は只若い人達の元氣のよいのを見て漸く心を取り直すのみであつた。この間西山君の示して呉れた親切に對しては心からの感謝を表しなければならぬ。横山君の元氣のよい姿も忘れることは出来ない。『寂しさ人々』の畫かざる畫家ブラウンを想ひ起させる平野ドクトルの聰明と親切とも心に深く刻まれた。

五

風に威されつ雨に虐げられつしてゐる中に豫定の日は遂に過ぎ去つて、私は閉會式にのぞむ身となつた。壇上に立つた際には胸が迫り涙がこぼれて暫らく物も言ひ得な

かつた程感激に充ちた私から見れば、餘りに殺風景な餘りに散文的な閉會式であつた。この光景を見て、私は更に新しくそして深い寂しさを感ぜざるを得なかつた。

宿を辭してから、多數の見送りの人々と海岸にまつこと一時間餘りにして漸く船が着いた。私達數人（中村の講習に出る人々）は小船に乗り移り更に本船―扶桑丸に乗つた。やがて出船の汽笛が鳴つた。見送りの人達も私達も、一齊に別れの言葉を交したり半巾や扇を振つたりして別れを惜んだ。初めてこの光景―船の別れの光景に接した私にとつては感慨無量であつた。船は刻一刻陸を遠ざかるに連れて、人も地物も次第に小さくなり且遠ざかつて行く。それにも係らず、見送りの人達は斷えず別れを惜しむ言葉を繰り返し半巾や扇を振るのであつた。この日の空は日本晴ともいふべき好い日和であつたので、お互の姿が殆ど蟻程小さく見えるまで立ち盡してゐた。併し、やがて全く肉眼では見る事が出来ないうらになつたので、私は漸く船室に歸つた。そして閉會式の不満が漸く充たされたやうに思へて快かつた。

西山君が同乗したので、航路の説明を聞くことが出来たのは思ひもふけぬ幸福であつた。風がなかつたために有名な嵯陀の岬も十分に眺めることが出来た。豫期した程の困難も感ずることなくして無事下田に着いたのは六日の黄昏時であつた。それから一行五人自動車に同乗して第二の講演地たる中村町に向ふことゝなつた。自動車の運轉手が道を譲る人達に「ありがたうございます」と一々挨拶するのは心地よいことであつた。自動車の終點には幡多郡教育會副會長小野信次郎氏が出迎に來てゐられた。宿に着くと今年早稻田の英文科を卒業した桑原君も見えられた。小野氏と諸般の打合せをし、桑原君から土地のはなしを聞いてからいつもよりも幾らかはやく床についた。

六

八月七日より十一日まで五日間、私はこの町の小學校で幡多郡教育會員のため「教育哲學」の題下に毎日四時間づゝの講演を試みた。一體に會員の氣分が緊張を缺いて

わたやうに思はれたが、私の僻目であれば幸福である。所謂南國は私の性格にそぐはぬかも知れない。四日目の午後には郡教育會の總集會があつた。私も出て「文藝について」といふやうな題意で一時間ばかりの談話を試みた。この會も遺憾ながら私の理想からはかなりにはかけはなれたものであつた。

この町に滞在する間私に寂寥を感じさせなかつたのは、偏に桑原君の親切の資であつた。私をして一見十年の知己の如く思はしめたのはひとり同學のよしみがあるためばかりではない。私は遂に氏のお宅にうかがつて夕食の馳走を受ける程まで心安立になつた。萩や梅や其の他生ひ茂つた草木に音信れる雨の音を聞きながら、桑原母堂自慢のお手料理をいただいて、しみりと人生を語り愛を談じた夏の夜の光景は、永しへに私の記憶に止るであらう。氏及び上田西山の三人と共に見た四萬十川の鮎の「火振」も忘れられない特殊の光景であつた。特殊の光景といへば、この地方の宴會の光景も亦たしかに特殊である。會席膳がなくて食物を一々小皿に別けて食べるのは支那式で

ある。水瓜を四角に切つて石垣のやうに積み重ねたのも特色的である。酒は三崎のよりは幾分よかつたが辛味は依然強かつた。片上さんには是非食べて来るやうにと注意された「鯉のたたき」は、コレラはさに只見ただけで止めたのは口惜しかつた。鯛の「開き」は山家育ちの私にははじめてのご馳走であつた。生魚を鮎にしたのも珍らしかつた。

やがて瞬く間に五日は過ぎた。ひそかに心配してゐた閉會式は豫想外に意義深いものとなつた。來賓の桑原母堂(女高師出身で高女教諭)が真先に祝辭を述べられたとからして月並ではなかつた。郡視學の感想にも傾聴に價する眞實があつた。急病で休んでゐられた小野副會長が全快して出席されたのも喜びの一つであつた。やがて講習を終つて歸られる中田高知市視學及び田所高知小學校長及び見送の郡教育會幹事某氏と自動車に同乗して上川口に向つた。浪が高く船が下田に着かないためである。上川口についた時には既に桑原君が自轉車で着いてゐられた。船を待つ間の夕暮の海景色

は美しかつた。大野川丸が港に入つた時には、殆ど日が暮れたので、見送つて呉れた桑原君だちと十分に名残を惜しむことが出来なかつたのは少からぬ遺憾であつた。

噂の如く海は少々荒れてゐた。併し、航海に自信を得た私は少々の荒れには恐れなかつた。船が動き出すと桑原君の親類の人だといふ婦人が訪ねて呉れた。この土地には珍らしく美しい人であつた。この人から國自慢を聞かされるのもいやみではなかつた。併し、其の人が下の船室に去つた後の私はかなりに苦しい目に遇つた。一方同室の婦人が數時間吐き續けてゐたのに加へて、他方——私の左側では五六人の人達が水瓜を肴に酒を飲みながら聞くに堪へない俗惡猥陋な話をしてゐたからである。曉近く須崎に着いた時には漸く救はれた氣持がした。

七

高知市は私にとつて感じのよい所であつた。先づ第一に浦戸灣の風光からしてよ

い。市視學の案内で一夜を過した城西館の如きは殆ど理想的の宿屋といつてよい。朝食を済し籐椅子に臥して涼しい風に頬を撫でられた時には、しみぐと旅の幸福を味はうことが出来た。併し、それも束の間、やがて私は高知新聞記者鍵山氏の訪問を受けた。用事は同新聞社の「市民講座」のため明日一場の講演をせよとのことであつた。私は快諾した。やがて十時近くなると中田視學が迎に見えられた。私が當市に立ち寄つた主なる目的は、氏を介して依頼された神職會主催の講演會に出るためであつた。

午前十時半から二時間餘市役所樓上に於て「思想問題に就て」といふ題下に思ふ所を述べた。それが終ると午後は休息し、夜は中田視學の案内で町を見物し鏡水樓で一盞酌み交した。茲では有名な「ヨサコイ」節も聞くことが出来た。併し、一人でうたふ「ヨサコイ」のはやしは私にはどうしても寂しく力がないやうに思はれたので數人で合唱したら幾分賑かにはなつたが、それにしても結局さびしい唄であるとい

ふ感じを打消すことが出来なかつた。ひよつとしたら、唄の調子が寂しいのではなくて唄を聞く私の主観の調子が寂しいのであつたかも知れない。……

翌日は早朝中田視學の案内で天守閣に上つた。今年には不思議に天守閣に縁のある年である。七月中には、岐阜縣で犬山城址を見、今日はまた茲で天守閣に上つたのである。中腹の茶店で口を漱いだ水はよい水であつた。やがて十時半から二時間近く市公會堂に於て「新道徳論」の題で所感を披瀝した。講演の途中、身體の疲勞が自覺されてかなりにいやな氣分に襲はれたのは悲しいことであつた。それだけ講演が濟んだ時には未だ嘗て經驗したことがない程の弛緩の情を感じた。——文字通に「やれ〜」といつた氣分である。

未だ嘗て經驗したことのない長い旅行も漸く終りに近づいた。私が高知市を辭して琉球丸の船べりに立つた時には實に感慨無量であつた。十數日馴染んだ四國の土地を離れたからである。この感慨中に中田視學が見送に來られた。ふとした縁で知己とな

つた氏が、私が四國の土を去る際に只一人最後の見送をするやうになつたのは、偶然とはいへ私には特に親しみを感ぜずにはゐられない。やがて汽笛一聲、私は遂に中田氏と思出の深い土佐—四國とを後にして歸途に就いたのである。私はいつまでも涙の目を上げて氏と高知の町とを眺めてゐた。併し、間もなく船はカーツを描いたので私は席に歸り、仕度を改めて再び船縁に出た。この際見たボラが水上に飛び上る光景は痛快であつた。

海はかなりに荒れた。船員は恐らく明日は船が止るであらうといつた程荒れた。私は心から自分の幸福を喜んだ。實際私は幸福であつた。今一日遅くなると私は大風雨に見舞はれなければならなかつたからである。繰返していふ。海は荒れた。併し、僅かな間に四國一週をするといふことに強い興味を覺えてゐた私にとつて、それは殆ど問題ではなかつた。實は少々荒れなくては面白くないといふやうな子供らしい冒険さへ心に芽ぐんでゐた。併し、夜中—眞暗な夜中ふと目をさまして窓から大海を見た

きには、流石に恐怖を感じずにはゐられなかつた。大海中に只一艘の小汽船！而も強風大浪！風の音も波の音もさすらひの身にはしみくくと寂しさを感じさせるのであつた。幸にして紀淡海峡に入ると風も浪も静まつた。それでも神戸についた時には二時間以上遅れてゐた。

斯くして、私は十七日に互る四國一週の旅を終へて八月十四日の朝無事三の宮驛上の人となることが出来た。特別急行券を求めた時には綿の如く疲れたからだにも歸京に伴ふ新らしい元氣が湧くのを感じた。

——八月二十六日相州湯河原温泉にて認む——

福島紀行

—

八月二十七日は忙しい日であつた。——

午前五時に床を出ると直ぐに顔を洗ひ、一風呂浴びてから妻と二人で歸京の準備にとりかゝつた。二人の子供は安らかに眠つてゐた。この日はどうしたものか發足の客が大さう多かつた。早朝から、徒歩で行くもの、人車に依るもの、馬車を驅るものが相次いで、宿は刻一刻と寂しさを加へた。心のせむか、宿の主人夫婦は勿論女中だちの顔さへ何となしに元氣がないやうに思はれた。子供達が起きて朝飯を濟すと、やがて私共が出發すべき順番となつた。

船
山
舟
大

反省と憧憬

一八六

一里弱の道のりは自動車では寧ろあつけない程であつた。停車場——湯ヶ原停車場に着くと輕鐵は將に發車しようとする所であつた。それにも係らず、大して混まないのは幸福であつた。やがて間もなく發車した。曇天で而も涼しいのが小さなそして病氣の子を連れた身には何よりも仕合であつた。海も大さう静かであつた。それだけ車の進み具合も何時もよりは速いやうに思はれた。小田原で下車すると何時もの茶店で小憩して電車に乗つた。電車も案外に空いてゐた上に涼しい風が斷えず吹いてゐたために、これも亦何時もよりはやく國府津に着いた。

併し、國府津からは東京行が間もなく立つので大急ぎで切符を求めて乗車した。サンドウィッチや力餅や茶などを買つてゐる中に發車した。見渡すと一車内に六七人しか乗つてゐなかつた。これで二時間後には東京に着けると思ふと心が軽くなるやうに感じられた。そのせぬか大磯あたりから居睡さへはじまつた。實は前夜は十二時迄仕事をし、今朝は五時に起きたので眠いのは當然のことであつた。

ふと目を覺すと、妻が田中王堂氏が同車してる旨を話したので、向ふの方を見ると如何にも王堂氏と孝子夫人とが乗つてゐられた。私は立つて挨拶をした。夫人とは初対面だからである。聞けば逗子からのかへりとのことであつた。それから互に亡くした子供のことなどについて話し合つてゐると間もなく品川を過ぎたので、自分の席にかへつて仕度をし、やがて東京驛に下車、二氏と別れ、車で自宅に歸へつたのは四時過ぎであつた。

直ぐに一風呂浴び、冷たいビールのコップを舉げ、食事をすましてから、「創造」九月號の殘部の編輯をすましたのは八時。それから一時間の中に福島行の準備を整へた。ところが車屋が十一時の汽車に行くと言ふが遅くなるからいやだといふやうな勝手な理屈で上野に行くのを斷つて來たので、家人に表通まで荷物を持つて貰つて少々早目に宅を立つた。